

曰若爾我爲遺作、既作若夫、可作一生支、夫曰、豈我不足、更復求斯、妻曰、我有知識、故來相憑、非我自須、匠作與妻、妻便付尼、時吐羅難陀尼飯食既了、便入內房、即以樹膠生支、繫脚跟上、內於身中、而受欲樂、因此睡眠、時尼寺中忽然火起、有大喧聲、尼便驚起、忘解生支、從房而出、衆人見時、生大譏笑、諸小兒唱言、聖者脚上何物、尼聞斯言、極生羞耻、佛之聞て、尼を波逸底迦罪犯こした。

(大正二年郷研第一卷第四號)

四、

○前回に述べた師走狐に付き、西牟婁郡下芳養村の人言く、「師走狐は執捉て居ても鳴せ」てふ諺有り、極月に狐存りに鳴くは次年豊作の兆故斯言ふこ。

○同郡中芳養村「ごろ本」の石地藏畑中に立つ、雨乞に此像を頸迄川水に浸す、萬呂村では早するこ下萬呂の天王の社の前の池端で一同酒飲み、「雨降れ溜れ蛙子、雫垂れ蝶つむぎ」と繰返し歌ふた。蛙や蝶つむぎも雨を請ふの意か、近年は此事絶た。件の天王池頗る深く、古より樋を全

く拔し事無し、今日全く拔んこ評定決して、斷行し懸るこ必ず雨る。又秋津村の「さこ谷」の奥の大池も、樋を抜きに行くこ、其人々が池に達せぬ内に、屹度沛然と降て來る、此池に頗る大きな鯉が主として棲むさうな。

○日高郡矢田村邊の俚傳に、梟「ふるつくふるつく」こ鳴ば翌日必ず晴(降盡こ云ふ洒落賦)又「來い／＼」こ鳴ば必ず雨る、是は犬を呼んださうな濡るなこの意か、本草啓蒙や倭漢三才圖會には晴る前に糊磨置け、雨る前に糊取置けこ鳴くこ有る。予の亡父矢田村産れて、此通り毎度予に話したが村に居る從弟に聞合すこ、今は其様事を言ぬさうだ、人二代の間に俚傳が亡びた一例だ。

○矢田村等で小兒螢狩の呼聲は、田邊のこ此違ふ、「ホータル來いタロ蟲來い、其方の水辛い、此方の水甘い、行燈の光で飛て來い」こ呼んだ。

○田邊邊傍で木菟を鯉鳥こ呼び、此鳥鳴くこ鯉の漁獲有るこて、漁夫此鳥を害するを忌む。

○田邊の老人傳ふ、宵の蜘蛛は親に似て居ても殺せ、朝の蜘蛛は鬼に似て居ても殺すな。是は夜の蜘蛛を不吉こするので、「吾せこが來べき宵也」こ、蜘蛛を夜見て喜んだ古風こ反對だ。

淵鑑類函四四九に論衡を引て蜘蛛網を用ふる計人に優れる由言て、亦掃其網、置衣領中、令三人知巧辟忘、智慧有る者故、物忘れせぬ靈符の代りに、蜘蛛網を用ひたのだ。採蘭雜志曰、昔有母子離別、母見蠶蠅垂紫著衣、則曰、子心至也、果然、故名曰喜子、子思其母亦然、故號曰喜母均之一物也。之に等しく、蜘蛛は物忘れせぬ物として、衣通姫が宵の蜘蛛は、帝が昏時に成るに自分を忘れず訪玉ふべき徴に悦んだのだらう。支那でも夜の蜘蛛を忌ぬは、開元天寶遺事曰、帝與貴姬、每至七月七日夜、左華清宮遊宴、時宮女輩、各捉蜘蛛於小合中、至曉開視、蛛網稀密、以爲得巧之候、密者言巧多、稀者言巧少、民間亦效之。然るに田邊の俗傳に、朝の蜘蛛を愛し、宵の蜘蛛を嫌ふのは、蜘蛛は夜中跋扈活動し朝に至て潜匿靜居する者故家内の治安上から割出したんだろ。廣土行記には、蜘蛛集於軍中及八家有喜事、之に反し、古歐洲では、蜘蛛の網が軍旗や神像に着くを不吉とした。佛國では蜘蛛走り又絲繰るのを見るに金儲けするに云ひ、或は朝ならば金儲け、夕ならば吉報を得に云ふ。然し一説には、朝の蜘蛛は少しく立腹、日中のは少く儲け、夕の蜘蛛は少しく有望を知すのぢやに云ふ。「サルグ」評して、蜘蛛が富の兆なら、貧民が一番富ねば成ぬ嘲たのは面白い。(一

八四五年第五板「コラン、ド、ブランチー」、妖怪事彙三九頁、

○田邊の古傳に、他人の足底を搔けば、搔るる人の身に持た病を、搔く人の身に引受るに、同地に近き神子濱では、人の足底搔く者早く死すに言ふ。

○右の兩地共傳ふ。狐は硫黄を忌む、依て附木又「マツチ」を袂に入れば魅されず。

○田邊邊でも和歌山市でも、小兒の慰みに、「高野の弘法大師、子を抱て粉を挽ひて、此子の眼へ、粉が入て困つた、今度から、此子を抱て粉を挽くまい」と早口に繰返し、滞り無きを勝ます。卅年前予日向の人より聞たのは次の通り、「ちきちきおんぼう、それおんぼう、そえたか入道、播磨の別當、焼山彌次郎、ちやかもかちやあぶるせんずり觀音、久太郎別太郎、むこにやすつぼろぼん」、英國にも舌振(タング、ツイスター)にて、同じ様な辭を疾口に言ふ戯れがある。

○西牟婁郡二川村五村等で、狩人の山詞に、狼を御客様、又山の神、兎を神子供に云ふ。狼に捕はるゝに、殺す所て無く扶けて去しむ。一七〇頁に高木君が書た、安堵峰の猿退治の話にも、兎の巫女を呼て祈らせたに有る、(兎は兎の誤植)狼形に山神を描いた物語の事、一昨年

二月の人類學雜誌へ出した。

○糶を西牟婁郡で「めだぬき」、「つちかい」(土搔きの義)又「のーぼー」といふ、安堵峰で予其肉を味噌で煮て食ふに甚だ甘かつたが、共に煮るべき野菜絶無で困つた。此物熊同様足に掌有り、人の如く立ち得る、好んで女に化るに云ふ。富里村の人(現存)春日蕨採りに山へゆくに、若き處女簪笄已下具足し、頗る艶なるが立て居た、依て前み近く忽ち見え、立て居た處に穴有り、家に還り犬を伴行き、穴を捜して糶を獲た。又秋津村産れて予の知れる老人、若き時村女に密會を約せし場所へ往て俟つに、此獸其女に化け來り、忽ち消失せ杯して毎度困らされた、其邊で「せい」と呼ぶ由。

○熊野に遊んだ人は熟知るが、潮見峠より東では古來山茶の葉で烟草を捲き吸ふ、木板を頭に載せ山路を通ふ婦女殊に然り、手づから捲て火を點る手際、他處の人倣し難い。齒無き老婆杯、件の葉捲を無患子の孔に管所たるに挿て吸ひ歩く、其山茶葉に好悪有て、撰擇に念入れ、路傍の一文店で列で賣る、古い狂歌に「熊野路は烟管無ても須磨の浦、青葉くわへて口は敦盛」。

○舊傳に、「文蛤は十萬石以下の領地には生ぜず」。

○高野山御廟橋の傍の井に菘んで影映らぬ人は近い内に死ぬさうで、前年田邊新町の或隱居試て見るに映らず、歸て程無く死だので、新町の人一同今に登山しても彼井を覗かぬ。

○田邊で蝸牛を囁す詞「てんくゝ蟲々、出にや尻摺ろ」近所の神子濱では、「てんくゝ蟲々角出せ槍出せ」、嬉遊笑覽卷十二上に「日次紀事云、蝸牛見人、則蝟縮、兒童相聚謂「出々出々不出則行打破釜云、爾此蟲貝俗謂釜有、今又江戸の小兒、角出せ棒出せまひまひつぶり、裏に喧嘩が有る云へるは、益々滑稽也」云へり。和歌山の岡山は砂丘で春夏砂按子^{あひだく}多し、方言「けんけんけそ」又「けんけんむし」、兒童砂を披て之を求むるに、「けんけんけそ、叔母處焼る」を唱ふ。廿二年前、予「フロリダ」州「ジャクソンヅキル」で、八百屋營業の支那人の店に、晝は店番、夜は昆蟲や下等植物を鏡檢した、毎度店前の砂地へ、黒人の子供集り、砂按子を探る詞に、「ゾロ、ゾロ、ハウス、オン、ゼ、ファイヤー」、矢張り「砂按子の家火事だ」と言て驚かすのだ、類縁無き遠隔の地で、同一の趣向が偶合して案出されたのだ。

○田邊の俗傳ふ、家の主人が自ら壁の腰張り、乃ち壁の下の方、疊に近い部分に紙を貼付る

さ必ず近い内に家に故障起り、一家立退ざる可らず也。

○又曰く、蜈蚣に噛れて痛烈しき人は、蝮蛇には左程痛まず。蝮蛇に噛れて痛烈しき人が、蜈蚣に於るも亦然り也。拙妻二人の子に驗するに、蚊に於ても同様なり也。

○又傳ふ、足痺れて起つ能はざる時、「痺れ京へ登れ薬の袴買て着しよ」云三び唱へ、疊の破れ目等から、薬一片抜き、唾で額へ貼ば即ち痺れ止む也。

○熊野詣りの手毬唄、田邊より纔か七八町隔つた神子濱で唄ふのは、末段が田邊の云違ふ(一二頁參看)「燈心で括つて、京の町へ賣に往て、叔母様に逢て、隠れ所無つて雪隠へ隠れてビチ糞で滑つて、堅糞で肩打た、」此唄の意何事も知れ難いが、一二頁に載たのは、熊野詣りの處女途中の佛堂へ拉行き強辱さるゝ次第を序し、今爰に記すのは、誘拐して京都の花街杯へ賣れ、其處で故郷より登つた親族に邂逅して羞匿る事を叙たのか云推せらる。

○四十年程前迄、和歌山市で川端杯へ獨遊びに出る子供を、母が誠むるに、日向の人買船に拉行れ炭を焼せらる云言た。其頃其様事有べきに非ねざる昔し、日向から遠國へ人買が出て、拉去た人を炭焼に苦使した時の戒飭が遺つたらしい。謠曲「隱岐院」に、「人買人、今日は

東寺邊、作道の邊りにて人を買ばやと思ひ候、中略、聲を立てば叶ふまじ也、髪を取て引伏て綿轡をむすはめ、畜生道に落行くか也、泣聲だにも出ざれば云々」帝國書院刊行鹽尻五四卷に、「人を捕へて、勾引して賣し者、猿轡にて、物言はんもすれば舌切る物を含ませしもぞ、近世も、出羽國南郷等には、盜賊有て人を欺き、猿轡を含ませしもかや」猿轡綿轡同物か人買は、人身賣買の義なれど、實は人を勾引す者を呼だ名らしい。

○田邊で兒女酸漿の鬺出すに唱ふる詞「酸漿ねえづき破れんな、(鬺が其心根に付た儘皮を破らずに出よ云ふ事)破れた方へ炙すよ。」

○玄猪の神に飯供ふる時、飯匙で十三度に扱ひ取る、此飯を若き男女食ふ也、縁付き遅い故に、既婚の人のみ食ふ。

○茶釜の湯沸て蓋を持上げば、家の福分隣家へ移るもて、速く水を注込む。

○和歌山で蟋蟀の鳴聲「鮭食て餅食て酒飲て、綴れ刺せ夜具刺せ」云て暑い時遊んで居た人、秋に成れば冬の備へをせにや成ぬも警むるのぢや也。幼年の頃予毎々聞た、倭漢三才圖會五三にも、古今泣云、蟋蟀秋初生、得寒則鳴、俚語有言、趨織鳴有婦驚も出たり。

○和歌山で蜻蛉の雌を維いて雄を釣るを「かえす」云ふ、之を爲す小兒「ヒョー、ヒョーやんまひよつちんひよー」云唱ふ、下芳養で蜻蛉かえすに、ホーヒーホー云唱ふ、鉛山では、「ホーヒーホー、かしややんまでかえらんせ」云いふ。花車乃ち仲居が嫖客を引く如く囀の雌蜻蛉に引かれ來れこの意か、田邊では單に「やんまほー」云唱ふ、神子濱では「やんま、こーちーこーの、猫に怯てこーかいの」云呼ぶ、交尾乍ら飛ぶを見て、「ぢよつかぢよーぢよーお坐り成れ」云へば止る云ふ、蜻蛉飛ぶを手網で奄んこする時、「まんぼこーまれ、お寺のお脊戸で、蠅を取て食はそ」云へば止る云いふ、田邊、和歌山等では唯「まんぼこーまれ、蠅を食はそ」云いふ。

○西牟婁郡二川村大字兵生邊で、「そばまきまんぼ」云ふ蜻蛉が、丁度鍬の柄の高さに飛ぶ時を待て蕎麥を蒔く、曆が行渡らぬ時は、色々の事を勤へて農耕をした、其時の遺風云見える。○其近所に笠塔云いふ高山が有る、實に無人の境だ、其山に木偶茶屋云ふ處有り、夜分狩人杯偶ま野宿するに、賑はしく人形芝居が現ずる由。

○「七つ七里、小便擔桶にも憎まれる」此諺紀州到る處で言ふ、小兒七歳に成れば、行作荒々

しく、自村のみか近傍七ヶ村から憎まれるこの意だ。

○熊野(一説伊勢)の神油蟲を忌む、三疋殺した者、參詣せずとも、其丈の神助有り云ふ。

(大正二年郷研第一卷第六號)

五、

○田邊の俚傳に、蟋蟀「きゝさせ、こゝさせ、子婦悪い悪いよ」云鳴く云ふ。(郷研第一卷三七一頁參照)

○婦女卵の殻踏ば、白血長血を病出す云ふ。又言ふ、卵殻食へば屁多く放る云。炭酸石灰で成た物が、體内の酸に遇て瓦斯を遊離する事、沸騰酸云同理故、是は事實で有う。

○和歌山及び田邊の手毬唄「釣瓶の下の織姫様は、遊びに行うて門迄出たら、可愛殿御に抱締られて、オホ恥かしや小恥かしや、此子生だら何著しよに、天鷲絨を著しよか緞子を著しよか、天鷲絨嫌なら緞子を著せて、乳母に抱して宮參り、宮へ參つてから何云て參る、一生此子を息災に、オー息災に、コー息災に、十せー廿せー、三十せー四十せー」(云算え進む)

○又田邊の手毬唄「藪の中から金女郎、誰も寝よみて鐵漿付て、お稚兒も寝よ迎鐵漿付て、お稚兒の土産に何貰た、油一升に胡麻一升、手拭にせう迎布八尋、八尋の布を一段紺屋へ遣か二段紺屋へ遣か、三段紺屋へ遣たれば、ヅア／＼淺黄に染て來て、一かんせう二かんせう、三かん所は、おぼつきこぼつき、誠おさいた、まこ二十さいた、まこ三十さいた」(こ算え進む)

○西牟婁郡栗栖川村富里村等で聞しは、昔し旅人霍亂に惱み死に掛つたが、藤天蓼また、ひを餌ひ全快、復旅に出立た故に斯く名くこ、富里村大字大内川に、今も此植物の葉を乾し蓄へ、焼て鼠を驅除する家有る由。

○田邊邊の俗傳に、四疊半の座敷の四隅に各一人居り、燈無しに室の真中へ這行くこ、真中に必ず別に一人立ち居るを觸れ覺る、乃ち一人増して五人こ成るこ。

○四月八日誕生佛に澆ぐ甘茶で墨を磨り、「昔より卯月八日は吉日よ、神さげ蟲を成敗ぞする」こ書いた紙片を柱に逆まに貼れば、長蟲(蛇)家に入らぬこぞ。此夜より蚊帳を釣始む。件の歌を書いた紙片を其釣手に結付れば、惡蟲寢所に入らずこ。海草郡の人言く、蛇のみならず、一切の惡蟲を避く、竈邊の壁にも貼るこ。

○田邊の俗傳に、産兒の胎衣を放置散佚せしむれば其子愚人こ成る、故に丁寧に保存すべし云。

○同地に近き下芳養こ西谷の間、牛鼻邊に搖岩こて大なる岩、海水中に有り、潮退ば歩いて往き登り釣を垂れ得、此岩毎月二回潮の増減に隨ひ所を變へ、或は陸に近く或は陸に遠かるこ云ふ。

○果蘊生たる數を算ふるこ多く落る由、田邊て言傳ふ。

○小兒同じ事を執念く言ふに對し、何度も言たら鬚黑なるこ言ふ。

○和歌山でも田邊でも、小兒群戲して興盡き散ぜんこする時、モ一疝氣腹痛こ呼て別れ去る是等古き洒落詞の殘るこ見ゆ。

○芳養村の人崎下孫七氏言ふ、濱麥一名筆草、弘法筆を抛たのが此草の根こ成つた。此根て瘡腫の上に南無大師遍照金剛こ書く似すれば平癒すこ。

又蓼の葉に黒斑二條有るを筆拭草こ呼ぶ、弘法此葉で筆を拭た跡也こ。

氏又言く、其村及び何地の金比羅も、神體は太き纜を蛇の如く卷重ねた物也、但し鎌首を起

す。

○崎下氏今廿七歳、十五の時、故郷上芳養村で他人の使し歩くに、毎夜犬に吠えられ頗る困る此前和尚たりしが還俗した人、犬を伏る法を教へ呉れた、犬に向ひ、戌亥申酉より丑子迄十ニ支を逆に三度唱れば、決して吠ず、因に一夜寝ずに熟練して、犬に向ひ試みたが、寸效無かつた。或人に語つて別に一法を授かる、戌亥子丑寅、五支の名を唱へつゝ、五指を折り固むるのだ、是も其験を見なんだ。

又言く、山野で草刈るに、人の身長程の小木に七里蜂の巢有り、動もすれば蜂飛出て迷惑甚し、上芳養の村人時々蜂伏の呪を行ふに甚だ效有り、其法樹葉一枚を採り、「シツボウケウソワカ」(七寶篋婆訶?)を三度誦へ、竹桿の尖を割て其葉を挟み、蜂巢に寄せ懸れば蜂飛出ず、縦ひ出るも整さず、但し何の祕呪も、無闇に人に話すに利ぬ物。

○拙妻の祖母八十一で廿三年前歿した、此人雷聲を聞く毎に、「神鳴桑原竹の根、落たらごん腹突貫ぞ」を續けて誦じ雷止む迄止なんだ。

○此邊で寒蟬「熟柿欲し」を鳴く、此蟲出て柿熟すを云ふ。

○俗に秋の日に焼たら穢多の嫁にも貰ひ呉ぬを言ふ、秋日に黝む一寸復り難いからだ。

○今は屢見ぬが、以前田邊の小兒嫁娶の眞似して月夜の遊戯をした。二人手を組み傾けて人力車の如くし、一女兒に諸兒の好きき帯紐簪等を假し装はせ、嫁にして乗せ、多くの兒輩隨ひ手を組だる二兒嫁を揺り乍ら「嫁様長持何時來るよ、明日の朝の今頃よ、(有り得ぬ事を云ふ也)月夜に提燈何事よ、闇夜に提燈最もちや、ギコサミギコサてほーいほい」を繰返し唱へ行く。前方には兒輩地上に家の間割を畫き、臺所、立關、座敷以下全備す、嫁到れば戸を開く眞似し挨拶して迎へ入れ、附添し者嫁を奥の間に伴行き踞らせ、自分等臺所に之き盛饌食ふ擬似する也。

○料理屋主人以下猿の名を忌み必ず言はず、止を得ぬ時は野猿を呼ぶ、博徒亦然り、縛らるゝを忌む故に聞く、土方人足も同様で猿の咄聞ても其日休業する由。

○上に述べた崎下氏言く、護摩焼くに必ず勝軍木を用ゆ、爆聲を發し黒烟を生じ、凜じき物也。又火渡りを行ふに必ず大豆の箕を焚附す。

同氏話に、今夏早魃で西牟婁郡富田の諸村水乏く河童夥しく上陸す。藤兵衛云ふ老人田働

するに、遠方よりホーイ／＼と呼ぶ事頻り也、河童何を言ふぞ、騙さるゝ者かと嘲り居たるに忽ち耳の邊で異様の大聲で阿房と呼れ、其儘聲を成り打臥し居るに八月一日咄された。

○拙妻其亡父より傳へしは、蜈蚣を殺すに跡より復出來る、之を停んじなら、殺された奴の出來りしと思ふ方に向ひ、輪違形を三度空中に畫くべし。

又蜂に整れた處に八の字、其上に九の字を畫く似すれば頼に痛止む。

○拙妻又言く、俗信に味噌桶を戸毎に出し洗へば雨降るに、實は何の家も味噌作る時節大同なれば、用る盡して桶を洗ふも粗同時で、其頃雨屢ば降る故也。又俗に居常外出せぬ人偶ま外出するを見て、味噌桶が出たから今日は雨ふるに嗤ふ。 (大正二年郷研第一卷第八號)

六、

○石芋(郷研一八二頁) 寛延二年青山某の葛飾記下に、西海神村の内、阿取坊あすけ明神社の入口に石芋有り、弘法大師或家に宿を求めしに、廻貸さず、大師怒て、傍に植設けたる芋を石に加持し、以後食ふ事能はず、皆此所を捨しより、今に四時共に腐らず、年々葉を生ず。同社の傍

らの田中に、片葉の蘆有り、同く大師の加持云ふに載て居る。何故蘆を加持して片葉にしたのか、書ては無いが、先は怒らずに氣慰めに遣た者に見える。大師は餘程腹黒い疳癖強い芋好きだつたに見えて、越後下總の外土佐の幡多郡にも食す芋云云が有る、野生した根を村人拔來り横切にして、四國願拜の輩に安植で賣る、其影を茶碗の水に映し、大師の名號を唱へて用れば、種々の病を治す云ふ。植物書を見るに、食用の芋も別物で、本來食えぬ物だ。甲斐國團子山の石皆團子也、大師通りし時、一人の姥團子を作り居るを見て、乞しも與へず、怒て印を結び、團子を石に化したに、柳里恭の獨寢に見ゆ。紀州西牟婁郡朝來新庄二村の界、新庄峠を朝來え下る坂の側に弘法井戸有り、泉水常に滿乍ら溢れず、類稀な清水だ。大師此所の貧家で水を乞ふに遠方え汲に行て與た、其酬に祈出したんだ相な。此峠より富田坂に至る、數里の間は平原で、耕作に好が、豌豆を作らぬ、之を植れば、必ず穴少しも無き莢の中に、自づこ虫生ず、隣近諸村に絶て其事無い、件の平原の住民等、大師に豌豆乞れて一粒も與えなんだ罰云ふ。又此邊で傳ふ、油桃は何處かは知らず、大師桃を乞ふた時、是は山茶の實ぢや、食ふ可らずに許つて與えず、大師之を呪ふて、地が毛を失ひ、山茶實の様に成つたので、山茶桃と呼ぶ

こ。倭漢三才圖會に、此物名都波木桃俗云豆波以桃こ出づ、十訓抄に徳大寺左大臣藏人高近して、大なる「つはいも、」の木を、内侍所に参らせたる事有り。大英類典二十一に、尋常の桃が今日も油桃を生じ、甚きは一つの桃實一部は凡桃、一部は油桃に生る事も有るから、油桃は桃の變成たる事疑ひ無しこ出づ。大師の一件は法螺談だが、桃が油桃に成たちう俗傳は、事實に違は無い。四國の食はず蛤は、蛤類の化石で、其にも同様の傳説が有る、芋や蛤が石に成ては人が困るが、桃が油桃に成ても一向構はぬ。又四國札所五十二番さかの大師堂の後の山に苞毬に刺無き栗を生ず、大師此山の栗を食ふこて、刺多きを惡み、咒ふたんださうな。又四國にも、紀州日高郡龍神村、西牟婁郡近野村等にも、三度栗有り、何れも大師が嘗みて、素的に旨かつたので、年に三度生れこ命じた由。紀伊續風土記七七に、西牟婁郡西栗垣内村三度栗多し、持山年に一度宛焼く、焼し株より出る新芽に實る也、八月の彼岸より十月末頃迄に、本中末こ三度に熟すこ有る。然らば名前程珍らしうも無い、基督も弘法流の胸狭い意地悪だつた者か、「ベツレヘム」邊に雛豆の形した石が多い野有り、土人言く、基督曾て爰を通り、豆を蒔く男に何を蒔くかこ問ふこ、石を蒔くのだこ對えた、基督言く、汝は石を收穫すべしこ、果して

石の豆斗り生たこ、(バートン夫人の西里亞巴列斯丁及聖地内情一八七五年板卷二、一七八頁) ビエロツチの巴列斯丁風俗口碑記(一八六四)七九頁には、基督で無く、聖母が豆を石に變じたこ有る、又「カルメル」山の「エリアス」の甜瓜畑の口碑を記し云く、此豫言者此地を通り喉乾きければ、瓜畑の番人一つ乞しに彼者是は石也こて與えず「エリアス」彼に向ひ石こ云た果は石に成るぞこ云て去る、其より瓜が石こ成るこ云へこ、實は石灰質で、甜瓜の狀したる中空な饅頭石だこ。又死海近所に「アブラハム」池有り、其底に石灰質の結晶滿布す、傳て言く、「アブラハム」一日「ヘブロン」より此所に來り、鹽を求しに、住民鹽無しこ詐る、「アブラハム」嘖つて、此後此地より「ヘブロン」への道無く、鹽も無く成るべしこ言ふに果して然りこ。

大師が己れに情厚かつた者に、相應以上の返禮をした例は、上述弘法井の外に、東牟婁郡四村、大字大瀬近所に寺有り、其邊に不蒔の蕎麥こて名高いのが有る、昔し大師此所の家に食を乞ふこ、何も無つたが、亭主憐み深くて、畠に播んこ貯置た蕎麥を有限施したんで、大師例の石に成れの咒も成らず、亭主に向ひ、此蕎麥の殻を蒔けこ命ず、其通りするこ、殻より蕎麥生

え大に殖え、以來歳々蒔ずに生茂るこは有難い。予其邊を毎度通るが未だ寺近く往ぬから、實物を見ぬ、然し大瀬から二里斗り歩いて、西牟婁郡野中に掛る小廣峠から西、數町の間は、畑地道傍所撰ばず、蕎麥に恰好で、人手を借すに續生し行くこ見ゆ。「コラン、ド、プランチー」の遺寶靈像評彙（一八二一—二）卷二、二〇二頁に、「メートル」尊者は、四世紀に宗旨に殉じて殺されたが、葡萄を守護すこ信ぜらる、生時一土民の許可無しに、其葡萄を食ひ、咎められて初て氣が付き、辨償の爲め、矢鱈に其土民の葡萄を殖し遺たからだこ載居る。

支那で食物が石こ成た例は、本草綱目に、會稽山に禹餘糧多し、昔し夏禹王此所に會稽して其餘食を江中に捨たのが、此石に成たこ見ゆ。又太一餘糧有り、一名天師食こ云ふ、前者は「いしなだんご」、後者は「すゝいし」杯云ひ、本邦にも有り、（重訂本草啓蒙卷六）前出甲州の團子石も此類ならん、明の陸應陽の廣輿記十七、四川の諸葛洞は、亮征九溪蠻宿此、設一榻、懸粟一握、以秣馬、後遂化爲石榻石粟こ見ゆ、此様に食物が石に成た例は有るが、食物を呪して石こした例は、只今見當らず、又臆出さぬ。但し偉人が乞食して、弘法大師同様施主に厚酬したり、吝嗇漢に苛く報いた話は、古來支那の俗間に行れた物か、波斯に行はる、支那傳

説なりこて、英譯「ハクストハウセン」の「トランススカウカシア」篇（一八八四）三七八頁に載たは、伏羲流寓て、或村の富だ婦人に宿を求めると、卑賤の語を放て門前拂にされた、次に貧婦の小舎を敲くと、歡び納れて有丈の飲食を施し、藁の牀に臥せ、又伏羲が襦袢に事缺くを慙と、終夜眠らず、働いて仕立上げ、翌朝着せて食事せしめ、送て村を出ると、別れしなに伏羲彼貧婦に汝が、朝一番に懸つた仕事は、晡迄續くべしと祝ふて去た。貧婦宅に歸て、先づ布を尺度始ると、夕迄布盡きず、跡から出て來たので大富こ成た、隣家の富だ女、乃ち前伏羲を門前拂ひした奴、之を聞て大に羨て居ると、數月經て伏羲復た村え來た、彼女往て、強て自宅え伴ひ還り、食を供し、夜中自分の居間に蠟燭を燃し通し仕事する様に見せ掛け、翌朝豫て捨て置た襦袢を與え、食を供して送り出すと、伏羲復た前の如く祝した、宅え歸る途中、布を尺度事斗り念じて、丁度宅え入ると同時に、自分の飼牛が吼る、是は水を欲い相な、儘よ布を量る前に、速く水を遣うと思ふて、水を汲て、桶から槽に移すと、幾時移しても桶一つの水が盡ず、家も如も水の下に成り牛畜溺死し、鄰人大に憤り彼女纔かに身を以て免れたと云ふ、此話の主意は、蘇民將來の話に似て居るが、子細は甚だ違ふ。（大正三年郷研第一卷十一號）

七、

○田邊の古傳に鹽を濫用するに目潰れる、又葱を知て火に入れば命取られ、知ずに入れば目潰るに。

○又隔障を病む者三毛犬（褐黑白三色の犬）を招き己が舌頭に沙糖を塗り、其犬に舐しめ其氣を吸込は治るに。

○西牟婁郡上芳養村の俚傳に蟹の甲に凹みて紋八一の二字如き有るは、昔し猴柿を蟹に投付た痕だに崎下孫七氏話す。

○又曰く溪流又他にも腹赤き「はへ」有り、方言「あかぶこ」に云ふ、昔し人有り此魚を取て炙り食はんにする所へ弘法大師來り、購ふて放つた、爾來腹焦たを跡赤いのだに。熊楠十五六の時高野山御廟橋邊て背に串の跡如き斑點有る「はえ」を見た、傍の人言く人が串に焼く所を大師が救命し此水に放ちしより斯成たに、然し其「はえ」は他所の溪水にも屢ば見る、上芳養村では「あかぶこ」乃ち腹赤き「はえ」は雌に限るに云ふ由、畔田翠嶽の水族志に「あかも

に」あかむつ」なき方言種々擧て白ばへの雄也に有るは別物にや。日高郡上山路村殿原の谷口に云ふ字の田中に晴明の社てふ小祠有り、此田に棲む蛭大さも形も尋常の蛭に異ならねど血を吸はず、醫療の爲捕へても益無し、莊子に散木は斧代を免るに云る類だ。祠側に晴明の井にて清水有り此殿原の應行寺といふ所隣大字丹生川間に晴明の淵有り、其上の道側に晴明轉してふ嶮崖有り、淵の彼方丹生川側に腰掛石有り、晴明熊野詣での砌應行寺で駕籠に乗り丹生川の方へ行くに途中、駕籠舁共其金を取んて此崖より晴明を轉し落すに死せず、川を渡り仲の石に腰掛憩ふ、大に驚き詔入るに晴明怒れる氣色無く望みの物を與ふべし迎金囊を與ふ、大に悦び持歸て開き見るに木の葉斗り入り有りし由、其より晴明笠塔山に上る、此山に馬の馬場にて長五六十間幅四五間の馬場如き平坦なる道有り、今に人修めざるに一切草木生ぜず、兩側に大木生並べり、誰も乗ざる白馬屢ば現じて馳行く。又三七二頁に言た通り木偶の茶屋にて人偶々露宿すれば夜中忽ち小屋立ち人形芝居盛んに催され、晨に及び忽然消失る所有り、晴明此處に來り笠を樹に掛け塔に擬し祈りてより其怪永く息だといふ。東牟婁郡七川村平井に云所の神林に晴明が手植の異樹有り、誰も其名を知らず、枝を折て子に示すを見るに「おがたまのき」だつ

た。那智山にも晴明の遺跡色々傳ふ、古事談に晴明者乍俗那智于日之行人也、毎日一時瀧に立
て被打けり、先生も無止大峰行人云々有るから廣く熊野地方を旅したかも知れぬ。

○郷土研究へ間寄書する田本仁七氏の母の話しに、五十年程前當郡三栖村の或家へ道者來宿
し立去に臨み宿の主婦の懇待に酬るゝて、大峯四所權現あびらうけん裳訶ミ呪を教へてくれた
主歸之を大麥四升五合ミ油うんけん裳訶ミ誤り覺えて行ふに諸病悉く治る、信徒膾炙して三年
斗り大流行だつた。其後道者復來り主婦が呪を誦するを聴き正誤す、正誤通り誦し始めてより
一向效無く患者來訪せぬ事ミ成たミ、語つた人の名迄擧たが閑田耕筆にもあびらうにけん裳訶
を油桶ミ誤り誦して效驗灼然かつたが正誤して後は一向利かなんだミ有たミ記憶する。

○海上で波高く至る時クオ〜〜〜ミ呼ミ鎮まる、風烈き時も然りミて大聲で喚くを去
年も自ら聞た、呼ぶミ鎮まるで無く鎮まる迄呼ぶのだ。

○四十年前餘五六歳の時遊びに出て一寸怪我し歸るミ今は亡父母が親の唾々ミ呪して唾を其
所に塗た、又打傷有ばチンコの呪ひ〜〜〜誦して其所を揉だ。

○巨蜂に整れて水飲めば死すミいふ。

○西牟婁郡富里村大字大内川の小兒螻蛄見れば「拜み拜まにや此道通さぬ」ミ云ふ。莊子に
螻蛄怒レ臂以拒ミ車轍、不レ知レ不レ勝レ任也。韓詩外傳に齊莊公出獵せしを螻蛄足を擧て其輪を搏
んミす、御者其力を量らず輕々しく敵に就くを笑ひしに公此天下の勇虫たりミて、車を回し之
を避しかば天下の勇士公に歸したミ有る。大内川の傳は之ミ反對で螻蛄が人を拜まにや人が螻
蛄の進行を止むるミ云のだ、此虫ほミ廣く俗傳迷信の所據ミ成る虫恐く無るべく古希臘て之を
マンチス（占者）ミ呼び今も佛蘭西のランドグドク地方の小民、之を拜神者ミ名けて神物ミし、
土耳其人アラビヤ人は其常に聖地メツカに向ひ拜む由を信ず、ヌジア人亦之を尊びホツテント
ット人は此虫人の衣に留るは其人神恵を得大幸有る徴也ミ傳ふ（大英類典十一板十七卷六〇六
頁、バルフォール印度事彙、三板二卷八五四頁）本草に此虫に食せて疣を療する事を載せ、和
名鈔に螻蛄和名イボムシリ本草啓蒙にイボムシ、イボサシ、イボジリ、イボクヒ、カマキリテ
ウライ等の方言を擧ぐ、埤雅に此虫葉を執て身を翳し蟬を捕へ食ふ、其葉を得た人は自分の形
を隠し得ミある。田邊に近き神子濱では之を「かまんミ」（鎌人の意か）ミ稱へ煎じ若くは焼て
服すれば脚氣を治すミ云ふ、此他に本邦で螻蛄に關する俗傳有るを知らず、若し有ば教示を乞ふ

和歌山市でも此虫を「拜めこうろう」と呼ぶ人有るも、たゞ其姿勢の形容迄にて歐洲の如く神を拜む等の説無き者の如し。

○上芳養村で梟家に近く鳴ば家内に病人生ずと言ふ。

○田邊々で桑木で瓢の形作り小兒に佩しめるに麻疹傳染すといふ。

○日高郡由良村邊にて家の邊りに柚を樹るを忌む又柚で挿木製れば化ると言ふ。昔し野猪の番する翁小屋に居守るに毎夜其老妻來り野猪來たか問て止す、家に歸て呵るに昨夜外出せずと答ふ、翁業腹を煮し、次回に來ば射殺すべしと言ふに嫗可しと答ふ扱又の夜復來つたから射留めて視れば自分の家の柚木製の挿木だつた。

○由良村邊で栗鼠は強き者で犬も困ると云ふ、其様子を聞くに尋常の小さき栗鼠に非ず、大なる種「をかつき」の事だ。西牟婁郡二川村大字兵生で聞たは、栗鼠は魔物で一疋殺さば殺した邊り栗鼠だらけに現はる、斯く魔術心得た物故同地方で聞た猴退治の話（郷研一卷一七〇頁）にも栗鼠を山伏とし居るのだと云ふ。予深山で栗鼠に遇し事何度と云を知ぬが餘り人を畏るゝ體見えず、追へば樹を繞りて登り忽ち枝上に坐して手を合せ祈念するの狀を爲す、是より斯る

迷信を生じたゞろ。加之尾を負て頭に戴く狀亦山伏が笈を負ひ巾を胃くに似たり。松屋筆記九五に高忠聞書上に射まじき鳥の事鶯鴉梟木菟鶴鴿庭鳥木鼠鼯鼠鷹の事は不及申此鳥共をば射まじき也、木鼠を射ぬ故は聖武天皇鐵城を破り開たる其謂れにて射まじきに被定置たる也云々。此故事詳かに知れぬが兎に角昔より殺すを憚つた動物の中に木鼠乃ち栗鼠が有たのだ、栗鼠齒勁くして鐵の如し、故に鐵網を用ひずば樊を嚙破て去ると倭漢三才圖會三九に見える、從つて何かの法で鐵籠を破て去ると云ふ話も有たのだらう。龍樹大士の大智度論第卅三に昔菩薩作一鳥、身在林中住、見下有二人入於深水、非人行處、爲水神所買、水神買法、著不可解、鳥知解法、至香山中、取一藥草、著其腎上、繩即爛壞、人得脫法。猶太の古傳にナツガーツラ鳥麥粒大の小虫シヤミルもて中を剖く事有り（ベールリング、グルド、中世談奇一八八四年版三九二頁）ノルマンデーに非列賓島及古羅馬の傳に啄木鳥靈草を以て硬木及び鐵を破ると言ひ（ブリニウス博物志卷十章十八ボスケー女史諾曼提釋史及奇談一八四五年版二一八頁一六六八年マドリド板コリン傳道經營譚一卷七八頁）文政六年種彦跋有る江戸塵拾五に田村元雄藏伽藍石にて唐の伽藍鳥子生置たる巢を水晶板で蓋へば此石を採將來て其板を碎く

石大さ茶碗の如く色黒く能く鐵銅磐石を碎く由載居る。吾邦にも昔し栗鼠が何物かの力で鐵城を破つた話が有るらしい、米國の黒奴栗鼠の鱗骨を守りに用る事一八九三年板オウエンのオールド、ラビット、ゼ、ヴーゾー一七四頁に出づ。

○今年十一月日高郡上山路村の老婆に聞く、昔しは其邊に鹽鯉のみ田邊より來る、鹽酷くて鯉で饜されて口腫塞るを三日腫れ五日腫抔云て悦んだ。今は道路開け生鯉を食ひ得て三日旨い五日旨いと言つて樂むこ。

○十七八年前中山路村の松本さいふ富豪始て馬を其村へ伴行き蓄し、當時六七十歳の老人馬を始めて見たる者多かつた、牛のみ通ふて馬は通はなんだこの事。

○明治十九年夏予現時林學博士たる川瀬善太郎氏高野山に詣て心願の人に頼まれ川瀬氏立入の荒神へ詣るに予俱に行つた。小堂の壁に夥く鎌を納め掛有り、川瀬氏も人に頼まれた鎌を掛て歸つた、其近傍「わたらえ」云所は田邊より高野へ參る道中頗る僻地だ、其地に人を葬り了つて上に火を焚き、鎌一本柄を下にして、上に立て、竹を周圍に刺す、魔物を禦ぐ爲に聞た。

○西牟婁郡の諺に雨粟日柿、是は栗實は雨多き程益々大きく、早り續く程柿實大なるを言ふ

のだ。(大正三年郷研第一卷第十二號)

八、

○田邊の人戯れに小兒をこそぐる時「一石二石三石しりしり」言ふ、先づ「一石二石三石」を徐々遠き處よりこそぐり行き「しりしり」急に言て喉又脇の下を襲ふ。又古老の傳に「紺屋の鼠藍食て糊食て隅こへクチュ〜」是もクチュ〜云時急に彼所をこそぐるのだ。

○西牟婁郡富里村大字大内川等で野猪を威す法、長き竹筒の一端を削り尖し底有る他端に繩を巻き中央を繩で括り、小流れ落る下に竹の尖つた端の内側を上に向つて置き、中央括つた繩を横に流し兩側の有合ふ者に結着け繩卷た端の下にブリキ鍋等を置く、然る時は水其筒に滿る時筒の尖端落る水に打れ下る故筒中の水出終り筒空に成り、他の端に卷た繩の重量で其方が跳下る時下の鍋を打つ、其音終夜止めので野猪怪んで近處へ來ぬ。予幼時有田郡津木村の者戯れに庚枝の莖で此通りの機を作り遊び居るを見た。

○西牟婁郡中芳養村の傳説に柚實を全て味噌に漬置ば盗人入來るを必ず知て「ゆうぞ」(言ぞ)と罵る、故に家毎に用意すべき物也。又田邊一般に柚の鍼で腫物を刺し膿を去ば毒残らぬと傳ふ。

○田邊で葬式行列に加り行く者過つて顛るる死人と共に葬らるる言て甚だ凶也。又嫁入道具を他家の葬式と共に遺るるを大吉とす、行て還らぬと云ふ意だらう。去年十二月二十一日予の知人の子の葬列の中を突貫して以前田邊町長だつた人の娘の道具を運び笑ひ乍ら人足等往た。誠に人情外れた仕方と惟ふ。

○小兒蠶豆の葉を息で膨し戯す、葉無き時小兒を欺く迎豆の葉遣るかと言ひ欲い答へるる順次眉目喉齒を指し其所々の頭字に因んで「まめのは」と唱ふ。和歌山田邊其他でする戯れ又田邊で小兒に教る戯れに先づ眼二つ次第に指し「めつけん(妙見)様へ參つて」次に鼻孔二つ次第に指し「花一つ取て」兩頬と兩耳を指して「方々へ聞へて」胸と口を指し「無念に口惜し」腹と尻を指して「腹切つて尻の穴」(死で終うの義)

○田邊近い神子濱の老人花咲叟の異態らしきを譚す言く、昔し老翁疲れて石に腰掛て息む、

猿共之を地藏の像と想ひ柿一つ宛持來り捧げたので夥く柿を得て歸る、隣りの欲深翁吾も然せんとて往て石上に腰掛る、群猿來て地藏様尊ければ山に祀るべしとて運んで川を渡る間、「私等陰囊沾ても構はぬけれき、地藏様の陰囊沾さぬ様に」と繰し唱ふ、老翁可笑に堪ず笑出すと猿共此像笑ふた笑はぬと言争ひ、又試に唱ふるると又笑ふ、依つて地藏像でないこと了り大に其詐を憤り山に運び行き全身を搔傷け老翁大に困んだ。

○又神子濱で強く風吹く時小兒等「山の天狗様些々風お呉れ」「山の天狗様些々風要ぬ」と唱へて走り廻る、其故を問ふと不知といふ。

○西牟婁郡二川村大字兵生に木地屋の段と云所有り、十四五年前木地屋五六家來り此所を開き棲り其後去て無し。阿波より出しと云持種の民で山を家とし山で生れ山で果る。言語他と異り、木地とは灰の木、榲、水木杯割易き木で盆椀等に作る、又特に木地と云は○此圖の如き器に餅杯を盛て神に供ふる物だ、此族神の器を作る故威高く常人木地屋と交れは威に負る連結婚せず、其婦女美人多し、食物常人と異なり、飯を練り幣の形にし串に貫き兩面に味噌を塗り焼き御幣餅と稱へ食ふ、香味異にして旨し、此族に他人が貸た物は取れず倒し切り也。兵生を

去て下川へ行き、昔は此族來れば所の者苦情言ふ事成ず、其邊の木地木を勝手に伐り木地に作りし、今は其様事も成ず林木を買て切り働く、此族の女常人の妻に成りたるも現に在り兵生の西面欽一郎氏話さる。

(大正三年郷研第二卷第四號)

九、

○長柄の橋柱(郷研一卷六四二頁参照)に其儘な話が紀州に在る。西牟婁郡岩田村に、富田川に沿ひて彦五郎堤云ふ有り。土臺(方言シキ)の幅二十五間、頂上の幅十間ばかり、此上にて祭の競馬をしたことがある。昔此堤度々の出水で破潰し、隣村迄も被害頗なりし故、奉行來り土地の人を集め、人柱を入れん議決せしも、進んで當る者無し。通行の人の衣服に横繼あらば其者を人柱とする事に定め一々検査せしに、彦五郎斯く如くなりし故人柱にせられたり。此大堤明治二十二年の洪水にて悉く潰れ了りしを近年回復せり。水害の後捜せしも人柱の跡らしき者更に無かりし云ふ。或は曰ふ件の二人斯る事を言ひ出して偶自分等の衣に横繼ありし故不得已人柱に成れり云、此邊夜通りて變死する者間々あり。近村は勿論二三里隔てた

る田邊町にても、男子の衣服に横繼を忌む。案ずるに斯る話古希臘にも有り。埃及王プーシーリスの世に九年の大旱あり。キプルス人フラシウス年毎に外國生れの者一人をゼウス神に牲せよと勧めしに、其外國生れたるを以て王先づフラシウスを牲せり云也。

(大正三年郷研第二卷第六號)

十、

○田邊等の俗傳に弘法大師唐土へ麥を求めに行き、犢鼻禪の中へ隠持來る。故に今に麥に犢鼻禪有り。犢鼻禪は麥の一面に縦四條有るを指す。又三月二十一日の大師の命日に雨降れば、其年麥凶作云。然れども大師が麥を傳へた云ふ事其傳記に見えず。大師前吾邦に麥有たは保食神死して腹中に稻、陰に麥を大小豆生り(書紀一)と有るで判る。范蠡作る云ふ范子計然(淵鑑類函三六五に引く)に、東方多麥、南方多稷、西方多麻、北方多菽、中央多禾、土之所宜也と有るから、早く日本へ渡つた物だらう。法顯傳に竭叉國(今のラダックミュール言へり)其他山寒不生餘穀、唯熟麥耳、衆僧受穀已、其晨輒霜、故其王每讚僧令麥熟、然後受歲、又陳

朝に天竺三藏直諦が譯した立世阿毘曇論に、高流、俱薦婆、毘提訶、摩訶毘提訶、鬱陀羅曼陀極、捧喜摩耶の六國の人、善持十善法、自不殺生、不殺他殺云々、其他生麥、不須耕墾、是麥成粒、無有糖糲、是其國人、磨蒸爲飯、而是麥飯氣味甘美、如細蜂蜜有有りて、昔し仙人が男女二小兒を此地に伴來り、麥を示し食ふ法を教へ、二小兒成長して夫婦成り、子孫成長して六國を分立した事を述居るが、餘り長いから爰に全文を引得ぬ。兎に角斯迄麥を重んじたり貴んだりする國が海外に在るを聞傳へ、弘法大師のお蔭で麥を食得るこ、坊主杯が大師の功徳を大くせんと言出した事かこ惟ふ。

○田邊の料理店杯、以前客人少なき夜、人に知れぬ様杓子を懐中にして四辻に趣き、四方を柏子で招き歸れば客人來る、但し人に知れては效無し云た。

○燈花立た時「丁子丁子宵丁子、明日は寶の(又黄金の)入り丁子」云て、注意して油皿の中へ落し込む。(或は云く紙に裹み置く。)然る時は物多く獲る。宵の燈花を尤も貴ぶ。料理屋博徒其他の家にも吉兆す。

○料理屋で煙管を指て舞すを甚だ嫌ひ、窃かに鹽撒いて淨む。又客の長座するを最早還さんさならば、箒を逆に立て手拭を冒せ、其て去らぬ時は茶を供ふ。又障子の下より三番目の、さんに煙管を掛ける。

○腫の色褐なる人眼を病まず、但し眼を病まば長く掛るこ。

○字書いた紙で小兒の不淨を拭けば其兒字書く事拙しこ。

○小兒鳶や鳥見る時、「みんなんをたゝき、からすかかんかねたゝき」云唱ふ。

○田邊附近神子濱の手毬唄、郷土研究一卷四九五頁に載せた田邊の者少し差ふ。「藪の中のお金女郎、唯寝よ迎鐵漿附けて、叔父御寝よこて鐵漿附けて叔父御の土産に何貰た。赤い手拭三尺、白い手拭三尺、奥の奥へ取置て、何時も來る長吉が、一寸持つて走つた。ここ迄走つた。京迄走つた。(是より以下手毬續け様に疾く突く)京ん京ん京橋々詰の、紅屋のおかさん染物は、扱も見事に好染まる。雀の小枕獨樂車、行燈車に水車、水は無い迎お宿迄、お宿長崎腰懸けて、申し申し小供衆様、爰はナーン云ふ處、爰は信濃の善光寺、善光寺様へ願籠めて、梅こ櫻こ上げたれば、梅は酸みて悪まれて、櫻は可きて讚められた。」

○田邊では此次に引續け、「爺よ餅搗け、嬭よ飯たけ、鮓をせう迎、うるめを買て來たら、棚

へ置いたら、猫に引かれて、猫を追ふ連、滑つて顛つて、鼻打つてびしやいで、其鼻何處へ往た。夕べの風で、ブツ／＼と飛で往た。トンと云たらお稻荷山から御水が出て来て、お萬こー袖な一がれた。またも流そと、水と氷と、搔て流せばスツトントン」と突き唄ふ。

○神子濱では「好え大根の煮たのを、お千代様に一切盛てやれ盛てやれ」と唄へ乍ら突き續け、最後に強く突き、疾く身を一廻り舞し、落來る毬を手の甲に受けて又突き初める。

○和歌山、田邊共に手毬突いて上り來るを掴み手の甲に上せず其儘突下し、斯して突續ける時の唄、「掴も、もーも、を喰ずにお辛氣、お手で突いて、お膝で突いて、スツボンボン、一廻り」と唄ひ了ると同時に一つ舞ふ。又「掴も、もーも、を喰ずに死で、お寺で鐘撞く法事鐘一廻り」てふ作り替も有る。

○田邊では人死すれば病中と稱へ魚類食ふ事常の如し。湯灌した後は食はず。新宮では湯灌後も食ひ、葬送出れば七日又三日魚を食はず。葬送の刹那残る所は悉く乞食に施す。

○鍋の尻の鍋墨に火付き赤く點じ乍ら移り歩くを、富里村等で荒神様畑を焼くと稱ふ。雨の兆だ相な。

(大正三年郷研第二卷第七號)

十一、

○雷の臍(郷研二卷五八頁参照) 紀州西牟婁郡西ノ谷村の小野崎稻荷祠は、數年前合祀せられてしまつた。此處に二十年ばかり前まで雷の臍と云ふ物が時々土中より出た。陶器質で其形も大きさも鯉魚の心臓(俗に白と云ふ物)ほゞである。小兒等之を集めて娛樂した。或は謂ふ昔時此處で短い足の附いた土鍋を作つた。其足ばかり作り置き鍋に附けぬまゝ事業廢止となつて棄て埋められたのだらうと。解説は其通りにして、何故之を雷の臍と謂つたかは分らぬ。此邊で鯉の心臓を臍と云ふ。それに似て居るからの名かと思考する。又俗話に、雷が鳴りに出行く留守を頼まれ、引出し一具を大切に片附けあるを見出し、雷が歸りたるにより一見を望むと一番上の引出しは人の眼、次は鼻、次は口と、臍を入れた引出しまで見せて呉れたので、今一つ残つたのを示せと望むと、臍の下は見せられぬ。

(大正三年郷研第二卷第八號)

十二、

○東牟婁郡色川村邊で、家に飼ふ蜜蜂に蟾蜍が附く其害は絶えぬ。其時は蟾蜍を捉へ急流の溪水の彼岸へ投げ、「一昨日来い」をこせひと云うて歸れば彼物再び戻つて来ぬと云ふ。田邊ではコガネムシなど燈火を慕ひうるさく飛込み來り仕事の邪魔をする時、亦「をこ、ひ来い」と云ひながら之を放ちやる。

○田邊の古傳に、雀兩足を揃へて躍りあるかずして一足一足交互してあるく者を食ふと癩病になる云ふ。

○閏年は蠶豆一方にのみ花咲く故收穫少なしと云ふ。又云ふ、閏年には槌の子を跨げても子を産む。閏年に人多く殖える云ふ意だ。

○西牟婁郡日來村字千束の住民は舊穢多也。他大字の者千束の婦女と通ずるに、女の身内火の如く熱き故、闇中にも彼字の女と判ると云ふ。

○海草郡清水と云ふ漁村では、漁家醜金して傀儡芝居を儲ひ興行させること毎度だ。其都度木偶の首一つ失せる。之を盗むと漁利ありと信じての所爲ちや。

○明治十三年頃海部郡(今の海草郡)湊村の西瓜畠を通るに、太い杭を立てた道傍に制札

を設けて、「野荒し致し候者は此杭に縛り付け小便相掛くべき者也 村中」と書いてあつた。此處に限らず田畠の成り物を盗む奴を捕ふれば斯様の杭に縛り晒し、村民大勢打寄つて、犯人の頭と云はず面と云はず、時ならぬ雨を灑ぎ掛けた風が、紀州の諸村に有つた。

(大正四年郷研第三卷第一號)

十三、

○一極めの言葉(郷研三卷三七頁参照) 嬉遊笑覽卷六下に云く、古今夷曲集に題不知、行安「小姫子の隠れごにさへ雜らぬは最早桂のは文字なるべし」。風流徒然草に、「其譯知れぬ事侍り隠れん坊に雜らぬ者はちつちや子持や桂の葉は子供の言ふ事也」と有り。行安の狂歌も是を採れる也。(中略、注の中に信田小太郎の淨瑠璃より、隠れん坊に雜らぬ者は、棟や辛夷や桂の葉、草履隠し肩車、足の冷いちよこ〜走りてふ詞を引く)。此戯れも一極めて鬼いぢはなる者を定る事也。其時言ふ言は。江戸にては「かくれんぼうに土用浪のかさつくれん坊とつりやそつちへつんのきや」、(又づん〜つめの云々、中切り〜ぢやむぢやが鬼よとも云り)。出羽庄内

にては、先づ幾人にも互に拳を握り出して、是を順に數へる如くにいふ、「隠れぼちだてやな
あなめちくりちんこはじきしまたのをけたのけ」、又「にぎりたぎりしよたぎりをけたのけ」こ
も云り。又江戸にては「いちくたちく」云事をもする也。箋絨輪に「寵愛の餘り猪口迄をい
こしほいちくたちくに毛だらけな腕」千雪。彼ち、や子持も、此一極め云事をするに云りし
諺なるべし云々(以上笑覽の説)。いちくたちくの詞は中村君の報告中にも出づ。昔し既に一極
(いちきめ歟)てふ語有た上は、中村君が新たに假設した選擇の言葉の代りに、専ら一極めの詞
をか文句こか云ひたい物だ。拙妻幼時毎も其祖母(二十五年前八十一歳で逝く)に聞いた。田
邊で隠れん坊の鬼を極る詞、「隠れん坊しやく、し、はしめ食て、雀は稻食て、チュツくくく
大勢の中でお一人をようのいた、お二人をようのいた、チャンくくヌクくくお上り成れよ」。唯
今そんな詞を識る者少なくジャン拳のみ用ゐるが、近郊神子濱では「ひにふにだあ、だらこま
ち、ちんがらこけこのこう」を算へる。守貞漫稿卷二十五にも、隠れん坊の鬼を定る詞、京坂
「ひにふに達磨さんが夜も晝も赤い頭巾かづき通し申した」、江戸「ひにふに踏だる達磨が夜も
晝も赤い頭巾かづき通した」を載す。又笑覽卷六下目隠しの戯の條に、「福富草紙目無しごち軒

の雀云り云々。賑草に今頃は彌生の半也、軒の雀迎、外の鳥よりは人近き者に侍れごも、人
を怕る、事少しも油斷せず、此頃は常の如く早くは逃去す、家の内迄も入て餌を求む、子を養
ひ侍る故也ご有り、是れ軒の雀の義也」を見ゆ。中村君の記事の三に依の鼠、右の田邊の舊詞
にし、(熊野では今も鹿をし、ご呼ぶ處多し)や雀を擧げたのは、軒の雀ご同例で、衆兒を是
等の群棲禽獸ご見立てたらしい。又田邊で「山の山の」云ふ兒戲は一兒鬼ご成て立つた周圍
を子供多勢手を維いて廻り行き、一齊に「山の山の庚申さん、お鉄を擧げて薯掘りに、焼てた
べる迎薯掘りに、其跡に誰が有る」を唄ふ。

十年斗り前迄、那智山邊で他人の所有地に入る者鉄を擔げ往き、地主に尤められたら薯蕷を
掘りに來たご云ひさへすれば其で濟んだ。本文の詞に關係無いらしいが序に述べ置く。

唄ひ畢るご同時に一同歩を駐め環をしたまゝ踞るご、鬼丁度自分の後に踞つた者の名を察し
言ふ。言中れば宜しく、遂に言中でざれば頭や尻迄も搜つて言中でしむ。扱終に言中でた後、
鬼立つて周圍の子供の頭を指し數へ乍ら、「頭の皿は、幾皿六皿、七皿八皿、八皿むいてかぶら
むいて、天に帆を懸け狐袋鯛袋、庚申さんの俎板、やぐらは鬼よ」(上出江戸の「ぢやむぢやが

鬼よ」參照)ミ唄ひ了る時、鬼の指に中つた兒が新らしい鬼ミ成るんだ。是よりも頗珍すこじんな事は、古來紀州諸方で満座の中で屁を放つた本人定かに知れぬ時、同じく一極めの法もて其砲手を露はす。其時唱ふる詞和歌山でも聞たが、忘れたから田邊のを陳べるミ斯うだ。「屁放りへないほヘイヘ(屁に出来る腫物甚だ痛む)放つた方へちやつミ向けよ、猴の尻シラがりがりキヤシヤシ(胼胝の方言)猫の尻灰塗れ、屁放つた子は、ミの子でムる、此子でムる、誰に中つても怒り無し」。傭つらら案ずるに屁を放りながら黙り隠す奴は、天罰を受けて臀腫るか、猴の尻の様に堅く成るか、猫の尻の如く灰に塗るべしミ脅す意ぢやらう。笑覽又云く、「隠れん坊ミは異り乍ら芥隠し又草履隠し有り。何れも同じ仕方にて、一人尋る者に中りたるに隠せし物を求め出さしむ。尋ぬる者を鬼ミ云ふ云々。甲乙次第を定むるに草履を片々脱いで之を集め、空に向ひて一度に投げ馬か牛かミ問ひ其伏仰を言ふ也。例へば象棋の金か歩かミ云ひ、碁の調か半かミてする事の如し」ミ。田邊ては左様にせず。鬼を定むるにやはり一極めの法有り。先づ幼兒多く圈を成し、一人中に立て兒共の履物を片々集め列べ、一端より手又棒で敲き算へ唱へる言に、「じようりきじようまん、にたん處はおさごいごいよ、剃刀買うて砥を買うて、子供の頭をぢよきちよきぢよきつミ剃つて

やろ、な、やのきはこんぼ」、(和歌山では「にたん處は」の代りに「おさ、にひつからげて」、「ぢよき〜ぢよきつミ」の代りに「ぞきぞきつミ」、其他は全く同じ)。此詞畢る時敲れた履物を其持主取りて穿く。幾度も斯うして一人の履物片足のみ残る時、其持主隅に向つて眼を覆し屈み居る間に、一同彼の片足を持去て隠し、還れば其主探しに往く。一同は「きーぶいきぶいあやう(殆い)そこらあたりは味噌臭い」ミ呼び喚ぐ。扱彼主其片足を見付け履還れば、群兒の圈中に立て新たに戲を始め得れど、遂に探し出し能はずば知らぬミ聲立つる。然る時は一同往つて見出し呉れるのだ。又紀州に「ずい〜車」ちう兒戲が有つた。和歌山での作法は忘れて了つたが、田邊近郊神子濱に残存する者を聞書するミ、先づ小兒數人火鉢を圍んで各々其兩手を握り差出す。一人片手で順に敲きつ、ずい〜車の博多獨樂、からすめひつからげてあきぐるま、あき通ればドンドコドン」ミ唄ひ終る時、中つた子が鬼ミなる。さて諸兒兩手を袖や懐の内に隠し居るを、鬼探つて悉く兩手を掴み了れば勝ミす。諸兒掴まるまじミ隠しまはる。鬼よりも多力なる兒の手は鬼たやす輒く掴み得ざるを興ずるのぢや。

(附記) 右書き了つて後、田邊の町外れて今も行ふずい〜車の一法を知得た。衆兒環り坐

し、各々兩手を握つて拇指の側を天に小指の側を地に向け差出し居るに、其一人自分の右手もて自分の左手の天の側、次に地の側、其より順次に他の諸兒の手毎の天の側ばかり打ち廻り、自分の番に當る時のみ左手の兩側を打きて其兩手に代ふ。初め自分の左手の天の側を打つと同時に唄ひ出す詞に、「ずい／＼車の博多ごま、此手を合せて合すかボン」、ボン云ふ同時に手を打かれた子は列を退く。打ち手「ボン」も同時に自身の左手の側を打けば其側を除き、其後他の一側を打ち中つれば自分を除く。斯て幾度も唄ひ打ち廻れば、衆兒退きて打ち手の外一兒のみ残る。其一兒が鬼となり、一同の手を片端から搜り捕ふるこゝ前述に同じ。

是等ニ關係無いが作法が似た事故、又予一向書籍で見ぬ故、何かに出居るか質問を兼ねて記すのは、今は知らず三十年ばかり前迄、大阪和歌山等で宴席に行はれた「法師様」ちう戯だ。明治二十年頃予三島中洲先生の息桂氏に、米國ミシガン州立農學校の寄宿舎で、密にホイスキーを購うて彼邦生れの學生に此戯を催し、其より大事件を惹起して衆人の身代りに予一人雪を踏んで脱走したのが一生浪人暮しをする事の起りて、國元へ知れたら父母は嘸や歎かん心配

したが幸ひに變作ふたりなが知らずに終られた。三菱創立の元勳故石川六左衛門氏の息で仙石貢君の夫人の弟保馬云人のみ其狀を親しく睹たのだが、非常に沈黙な君子で、六年後龍動で三十四日同棲飲遊したが、遂に一言も此事に及ばなんだは今に感佩し居る。今も健在なら讀者中に知人も多からうから情願御禮を述べて欲しい。此序言が長いが彼遊戯は左迄六かしからず。酒客多人環り坐り、其一人手拭て眼を縛り居るに、他の一人が環の真中に居て「法師様え、法師様え、ごこえ盃さーしましよ」も唄ひ、扱こゝかこゝかこ唱へ乍ら思ひ付次第に人々を指す。假の盲法師「まだ／＼」も云へば、人を指更へ、「そこぢや」も云へば指れた人が飲まねばならぬ。飲了つて手拭を受け新たに法師に成る事前の如し。拙妻言ふには、田邊に行はれた「べろ／＼」の神様」も云ふ戯、趣は同じくて作法稍差ふ。環中の一人が扇杯長い物を兩手に挟み、鼓ふりこ（方言べろ／＼太鼓）の如く振轉して、「べろ／＼」の神様は正直な神様でおさゝの方面向る、面向る」も唄ひ了るに、同時に環坐する一人を指し誰人か問ふ、環坐せる一人眼を覆せる者、指れた人の名を言中れば、中りし者一盃吞み代りて眼を覆す。此戯はも何名付られたか大方の教を俟つ。（大正四年郷研第三卷第二號）

○地藏菩薩と錫杖 吉田美風氏は地藏の錫杖は日本で附け添へた者と説かれたさうだが(郷研二卷五七五頁)、其は間違であらう。予往年歐米の諸博物館で多く支那や印度や西藏(チベット)の佛像調査を擔當したが、地藏の相好は日本の多多く異ならず。錫杖を持つたのも有つたこと記憶す。書いた物を證據に引くに、宋高僧傳卷十四、百濟國金山寺眞表の傳に此人發心して深山に入り、自ら截髮して七宵の後、詰旦見地藏菩薩、手搖金錫爲表策、發教發戒緣、作受前方便云々有る。金錫は金色の錫杖に外ならずと思ふ。
(大正四年郷研第三卷第二號)

十四、

○打出小槌の童話 紀州に傳はる打出小槌の童話、小生久しく忘れ氣付かず居りしに、昨夜四歳になる小生の女兒に聞き(童話はなるべく子供の語る所眞に近し)、さて妻に聞きたる上左に申上候。多分紀州のみに限らぬ話と存候。グリムスの獨逸童話其他伊太利葡萄牙等にも大略同じ話多きも、槌の事は無之候。「むかし繼母繼女を憎むこと甚しく、林中へ柯子(カ)を拾ひに遣るに、吾が生んだ女には尋常の籃を渡し繼女には底抜けた籃を與ふ。林に入り柯子を拾ふに、繼

女如何に勉めて拾ふも籃の底を漏れ落ちて滿たず。實の女は繼女の籃より漏るを拾ひ容易に滿籃して去る繼女籃充たずして林中に日晩る。泣き居るに遠方に幽かな燈影あり。因つて尋ね往けば老嫗一人あり、入りて譯を語るに嫗之を慰み、如何なる事あるも物言ふべからずと教へ林の下に潜ましむ。夜に入り家主の鬼歸り人臭い、と云ふ。嫗言く誰も人は宿めずと、鬼安心して眠る。嫗握り飯を牀の下に落しかの少女に食はす。鬼寢めて何をするに云ふに、嫗今夜は簀子(すし)(牀のこし)の祭なりと云ふ。然るに少女耐へず喉を咳る。鬼さては人あるに極つたりとて牀をまくり少女を見付けて啖はん。老嫗遮り止めて其繼母に苛遇せらるゝ狀を説く。鬼は諺の鬼の眼にも涙を出し、不愆の事なれば吾能く難を解くべしとて槌一つ與へ、汝家に歸り之を母に呈せよと教ふ。女家に歸るに繼母何故おくれたるか怒る。女彼槌を母に獻じ罪を赦せと乞ふ。母大に怒りこんな物いらぬとて槌を抛り付けるに夥しく錢出づ。是れ貨を打出す槌と知り貴寶を得たるを悦び、それより此繼女を實子同然に愛したと云ふこと也。」

右の簀子の祭は何の事か。御承知の讀者は教示せられんことを望む。(大正四年五月郷研第三卷第三號)

○田邊で小兒蟻群を見れば「蟻呼で来い、きも呼で来い」、又「蟻の婆よーく引にごんせよーく」、和歌山では「蟻さん来い、きもやろか、御前の力であくものか」。きもこは大きな武勇な蟻魁ありのかしらを云ふ。和歌山で以前行はれた蟻の道ありのちみち云ふ兒戯の事は、「民俗」第一年第一報へ出し置いた。

○あだくま獮が女に化ける事、郷土研究一卷三六九頁既に述べたが、其後西牟婁郡上秋津村の人に聞いたは、獮は誠に旨く美装した處女に化けるが、畜生の哀しさ行儀を辨へず、木に捷く昇つたり枝に懸下ぶらさしたり、處女に有るまじし事斗りするから、化の皮が直顯はれる。予幼時雷獸かみかみ云ふ物を紀州で屢ば見世物で見たが、悉く獮だつた。馬琴の何かの小説に附けた雷獸考の中に猪狀で爪鋭き雷獸を畫き有つたが、獮は支那で猪獮ちくわん呼ぶ程猪に似た者だから、之を雷獸とするは少々據有りそう。文部省の博物指教圖に畫いた雷獸一名キテンは貂の類らしい。

○西牟婁郡湊村字磯間は、萬葉集に見えた磯間浦いそまのうら云ふ事、風景絶佳だが其住民は夙しよくだ、猴神さるがみの古社有つて今は日吉神社と號し、先年合祀さるゝ處を予輩烈しく抗議して免れた。(二卷三〇九頁中島君の報告に夙しよくと犬神猿神さるがみと關係有りとする説參考すべし)。田邊近所には長野村ながのむら

稻成村大字絲田と磯間の三所に各猴神社有つて、長野村が陰曆の十月、絲田が十一月、磯間が十二月の某の申日祭禮をしたが、絲田と長野村のは合祀せられ、磯間のも祭日を改めた。以前は舊師走の寒い夜中に神輿渡御有り。社の側に天然に橋の如く高く二つの岩山の間いそまのうらに掛つた岩の穹窿アライチ有り。昔此邊で人身御供を行ふたと言傳ふ。磯間と異り長野村や絲田の住民は夙しよくで無い磯間の女は昔より専ら京都へ奉公に出たので、言語應對頗る温雅だ。漁業と農桑を兼營み一體に富有である。以前は此猴神の祭へ日高郡等遠方から農民夥しく參詣した。「さるまさる」と言うて、猴を農家で蕃殖の獸として尊ぶのださうな。

○田邊近處稻成村の稻荷神社は、伏見の稻荷より由緒古く正しいものを、昔證文を伏見へ借取られて威勢其下に出るに及んだ云ふ。今も神林鬱蒼たる大社だが、此神甚だ馬を忌み、大正二年夏の大雨にも鳥居前で二三疋馬駈する、翌日忽ち少雨ふり、其翌日より大に降つた云ふ。然るに老人に聞くに、以前は此鳥居前に馬場有つて例祭に馬駈した云ふ。されば馬場が無くなつてから神が馬嫌ひに成つた者か。

○「紀州豊年米食はず」と云ふ古諺有り。紀伊豊年ならば米多く産する他國皆豊年ならぬ意だ

紀州は米を外へ出す國で無かつた云ふ。

○猫が蟻を食物に混じて食へば力強く成る。又犬の子糞を食ひ人の子味噌を食へば眼明かに成る云ふ。

○西牟婁郡下芳養村の老人言く、昔は犬止三脚五德(鑄鐵製の鍋を懸る器)は四脚有りし。弘法大師物書くに笑ふ云字を忘れ困却中、犬が糞を冒り歩み來たので、犬が竹を冒れば笑の字に成るに悟り、犬に悦んで五德の脚を三本に減じ、其一脚を犬に與へて四脚にした。其報恩に今も犬尿するに必ず一脚を揚ぐる。

○數有る竈の内一番大きなを田邊で「大きく」云呼ぶ。其灰の中へ茶碗一つ伏置くか、主人の下駄を金盥で覆置けば盗人入り得ず。盗人入らん云欲する家の盥で大便を覆せて家内を昏睡せしめんとして、右の法を行はれては其效無し。

○陰曆十月中に亥猪三つ有る年火災多し。以前は一侍二百姓三商賣に順次異級の人が祝ふたが、大抵十月に亥猪二有るのみ三つ有るは稀だ。神子濱では三番目の亥猪を穢多亥猪云ふ。

○毒蟲毒魚に螫された時、有合ふ地上の石を取て裏返し置けば、痛忽ち止む云ふ。

(大正四年郷研第三卷第五號)

十五、

○紀州の七人塚 紀州西牟婁郡長野村大字馬我野字鎌倉に七人塚云ふ所がある。塚は今は無。昔七人の山伏がこゝに住んで居た。ある日田邊沖を通る船に向つて秘術を以て之を止めるに、船の中にもえらい者があつて沖より山伏どもを見付け、秘術を行ふて止めたから七人の山伏皆動くこと能はず、遂に其處で死んだ云ふ。今も尚沖を通る船から此地を望むと、一點の青い火が怪しく夜光る云ふ。以上本年七月十一日の牟婁新報より抄出す。又森彦太郎氏通信に日高郡上山路村大字西にも七人塚あり。鶴が城落ちた時戦死の七士を葬るに稱して塚の上に小祠がある。尙紀伊續風土記牟婁郡三里郷伏拜村(今の東牟婁郡三里村大字伏拜)の條にも七人塚を記し、堀内左馬助鬼ヶ城を攻めた時、三十七人手を負ひて死す。其七人を葬つた所で碑石一基あり見えて居る云ふことである。(大正四年九月郷研第三卷第七號)

○血を吸はぬ蛭 郷土研究一卷十二號に、紀州日高郡上山路村殿原の谷口云ふ小字の田中

に晴明の社てふ小祠あり、此田に棲む蛭、大きさ形も尋常の蛭に異ならぬ、血を吸はず醫療の爲捕へても益無しと書いたが(郷研一卷七五二頁)、そればかりでは面白くない。昨年五月彼所から知人が来たので篤と尋ねるに、晴明此處の蛭に血を吸はれ、怒つて其口を捻ぢた。それから一向血を吸はなくなつた。川一つ渡つてナガソウと云ふ小字には蛭頗る多く、至つて血を吸ふ力が強い故、醫用として多く捕らるゝと云ふ。又西牟婁郡日來村の不動阪の邊に地藏菴あり。其地藏を念ずれば産安く、又村人祈願して蛭を調伏す。故に此邊の蛭人を整さずと聞く。(大正五年一月郷研第三卷第十一號)

○肉吸ひと云ふ鬼 紀州田邊町住前田安右衛門今年六十七歳、以前久しく十津川邊で郵便脚夫を勤めた。此人話しに昔し東牟婁郡燒尾の源藏てふ高名の狩人が果無山を行くに狼來つて其袖を咬み引き留る。其時十八九の美き娘ホーホー笑ひ乍ら來り近付き、源藏火を貸せといふ。必定妖怪と思ひ、止を得ずんば南無阿彌陀佛の彈丸で撃べしと思ふ内、何事も無く去る。然る時狼又其袖を咬み行べしと勸むる様子に源藏安心して歩み出した。其後又二丈程高き怪物に遇ひ、南無阿彌陀佛と彫付た丸で撃つと、大きな音して僵れたのを行て見れば白骨のみ残り在た

と、又廿五年前、前田氏北山の葛川郵便局に勤め居た時、或脚夫木の本の附近寺垣内より笠捨てふ峠迄四里のウネ(東山の背)を夜行し來るに、後より十八九の若い美女ホーホー笑ひ乍ら來り近づく、脚夫は提燈と火繩持ち有た、其火繩を振つて打付るに女は後ろへ引返した。脚夫葛川の局へ來り、恐ろしければ此職永く罷べしと云ふ故、給料を増し六角(六發の訛稱、拳銃の事)を携帯せしめて依然其職を勤め彼山を夜行したが一向異事無つた由。是は肉吸と云ふ妖怪て人に觸れば忽ち悉く其肉を吸取るこの事。熊楠曾て廿年前出たウエルスか誰かの小説に、火星世界の住人此地球へ來り亂暴する體を述て、其人支體に章魚の吸盤如き器を具し、地上の人畜に觸て忽ち其體の要分を吸ひ奪ひ、何とも手に合ぬ筈の處ろ、彼世界に絶て無くて此世界に有餘つたバクテリアが、彼の妖人を犯して苦も無く仆し了るに有た記憶するが、其外に類似の噂を聞た事無く、肉吸ひてふ名も例の吸血鬼杯と異り頗る奇抜な者と惟ふ。

(大正七年二月人類第三十三卷)

附

錄

「郷土研究」の記者に與ふる書

五月十二日の芳翰拜讀。「郷土研究」は地方經濟學の雜誌なることは、創立の際貴下より承りたること有之。然るにこの地方經濟學の分限、小生には分らず。地方成立の研究と言はば之に伴ひて必ず地方政治學研究の必要あり。かの神社合祀の利害又地方に萬づ利益事業を計畫する利害の如きは、尤も此雜誌にて論ずべきもの也。たゞ椎茸を多く出すか柿を五百本植ゑたかにては、雲煙過眼閑人の思の儘の日記同前紙潰れなり。必ず之に今後の利害論を指示せざるべからず。而して經濟と云ひ政治と云ひ、地圖と統計とを伴はずしては、地方々々の事精確に知れず。地圖のことは姑く措き、日本の地方統計といふもの、思ひく地方小吏が勝手に數を見計ひ、帳面と報告を合すものなることは御存知の通り、

たゞへば當町(紀州田邊)の鬮鷄社に樟樹二本しかなきに、役所の帳面は二十五本、これは全

くのうそにも非ざるべく、即ち從來植付けたのが前後二十五本あり、樟樹なごは栽えたら一寸失せるものに非ざれば、二十五本ありと書付けたる也。然るに近來神林で物を盗むは常の事に、何の取締も行届かず、神社で盗伐した木や柴をかつぎ、毎日神社の前を通り過るを咎めぬほごなれば、二十五本あるべきものが全く失せて二本しか無き也。蠶業の報告如きは丸でうそにて、蠶業は年により興廢夥しきものなれど、全く蠶業絶えたりと報告するは縣廳のうけ宜しからぬ故、蠶業無しと報告する村一つも無し。實際は蠶も見たことなき村でも、多少の蠶業ある如く書上る也。又地方の報知虚報多く粗陋多きは、實際朝來沼あつせぬまの耕地に二十四町ばかりなるに、縣廳では四十三町、東京の官廳では百四十三町となり居るにても知れる。當地の江川浦は縣下第一の大漁村なり。それすら年來縣廳へ書上げし通りの損益にては漁夫等たゞ働き又年々食ひ込む外無し。斯くては此漁村今までつゞく筈無し。丸で勘定合はぬなり。然るにごうやらかうやら漁村續くのみならず、救済會ごか何ごか小言いひ乍ら金を出し積立て居る。實は縣廳へ年々の漁獲高十三萬圓と書くごするご、其實際は十七八萬圓の漁獲ある也。色々費用課税夥しき故、加減して少なく書くなり。之に氣付かず、又氣を付くべきご言ふごご

すら氣付かず、斯くては年々損失ばかりで其漁村は全滅する筈ご云ふごごにも氣付かず。語を換へて言はゞ漁利の外に何かの内職あるべしご云ふ見解なり。かゝる除外例多き統計は、學問上あつても無くても何の益無き紙潰れの統計なり。

地方經濟は地方に道が出来た、犬に車を牽かす所ご牽かさぬ所あり、昔紙を作つたが今は布を作る。賣淫女が片手に魚を乾す等のごごを序列した計りでは、日本中の一村一小字何れも日生業無き所なければ、人別に骨相を記する如く、事煩しくして何の益無し。もし之を學説らしきものごせんごならば、利害の因る所を攻究せざるべからず。産業の變改、地境の分割、市村の設置、水利道路の改全、衛生事業又殊には地方有利の天然物を論ぜざるべからず。然るに小生氣が付かぬ故か、地方經濟云々を主眼ごする「郷土研究」に、從來何たる地方經濟らしき論文の出しを見ず。たゞ俳人の紀行にして俳句を抜去りたるが如きもの二三を見しのみ。

是は無理なごごに非ず。地方經濟地方法制ご云ふごご、材料繁冗にして何の興味無きによる。之に加ふるに吾邦の官廳上下虚偽を事ごし、肝心骨髓たるべき統計が右の如く全く間に合せ公儀を繕ふ偽ばかりのものたるに因る。何の學問でも數字を離れては學問にならず。殊に地方經

濟如きは然り。然るに此數字上信頼すべき材料が一つも無き也。又一つには地方經濟のこゝ、吾邦では何たる興味を感じぬほゞ材料が薄弱且つ乏しき也。御承知の通り礦物は岩石の(？)基にて地球を成すものは岩石地層それがみな礦物より成らざるは無く、又一方には動植物人間迄ももこは無機體即ち礦物元素より成り居る。生物何れも礦物より進化せし者たるは疑を容れず。然るに此礦物の學云ふもの、専門家はあり乍ら何れの國に住きても礦物學會も無ければ礦物學専門の出版物も永く續かず。英國なごには絶無なり。是は礦物を多く集めて一々觀察すれば相應に面白いものながら、堅度ごか電力ごか實物に就ての外書物で見たり書いたりしては一向それ相應の感念を生ぜず。言はば面白味無き故の存じ候。地方經濟の學の如きも先づはこんな事にて、實際地方經濟に身を處する人にはそれ相應の興味もあり、又利害は頗る嚴しく感觸せらるゝものながら、其事項一々煩鎖にして規則立ちては筆に序述し盡し難き上、一地方一地方に限るごは他地方の人が讀んで何ごも思はぬ事ご存候。故に地方經濟の端緒ごしては、地方制度位から論を始められ度事なり。然るに此迄「郷土研究」を見るに、地方制度に關する論文又甚だ少なく、小生なごは何かあつた位の記憶に止まり何が論ぜられありしやを記憶せず。

地方制度にも亦記録を楯ごしては一向見出し得ぬ大要件多し。當地方の漁人が海上に魚(たごへば鯉)を見出した時、一番船二番船なき云ひて、鯉を釣るに船の順序ご制限あり。又勝浦邊では入港の際一つの株に二つ以上の船の繩を結付るに、一番二番三番ご争ふ。其事甚だ六つかしく、古老をわざ／＼招き來り即決に裁判させしを小生親ら見しごあり。筏流しが木を出す舊慣其他かゝるご六つかしき古傳多し。全く記録には少しも無く老人に聞置くの外なし。其老人何れも正しき先例を知悉せるに非ざれば、老人同志異説も多くあり。日本紀に一書曰、戰國策や史記にごちらが正しくごちらが勝つたか分らぬやうに、魏の國の條ご秦の國の條に記事の全反對異同ある如く、此等は雙方ごも一説ごし控へ置くの外無し。乃ち雙方共個々に正しご見たる説なり。

凡て古代の事や田舎の事は一説を正一説を否ごすべきに非ず。同じ神にて一地方の傳に長生なりご云ひ他地方では蛇に殺されたご云ふ類多し。此は同名の異神一は長生し一は殺されたか又一神長生し一神殺されしを、後世同名ごしりて同神ご見たりする外無し。又他の神の傳を訛り傳へたるものあるべし。さればごて其傳全く虚偽ご云ふべからず。乃ち其神長生したる外に

他の神が蛇に殺されたる也。

去年當地近傍鮎川村にて、夜這禁制の爲壯丁夜出に必ず提灯を點し行かしむる法を設け、色色三六つかしき制規を定めたり。まことに都會の人が聞かば笑ふべきの甚しき也。併しそは笑ふ者の過にて、實は今日も地方に夜這云ふ事の一夜も行はれぬ所無く、之を郷土存立の大要件として村方に行はれ居るなり。夜這云へばこて彌次郎兵衛北八の徒の行ひし如き事に非ず。昔の物語に貴神が歴々の娘に忍び通ひし如く、中古歐洲の記に多き *Serenade* (妻戀ひ歌樂) 又米國創立の頃の *Bundling* (衣裳解かず村の男女共臥すこと、衣裳解かぬに子の作甚だ豊年こはをかし云ふやうな妙文ワシントン、アーピングの作にあり)、又言はゞ今日歐洲の男女年頃になれば必ず相伴ひ遊ぶ如きことにて、田舎は田舎だけに其事や、露骨なるのみなり、娘をば甚だしく附けあるき一度嫁すれば一向知らぬ風する村あり。又娘をば頗る忌み已嫁の婦のみ覩ふ風の處あり。(眞臘風土記に眞臘人は妻を人が附けまはるほゞ夫之を自慢すこあり。チ、スベオにて伊太利なごに人の妻のみ専門の男多く、以前は夫が自分の妻他人に遊びあるくを一向構はぬを自慢の美風とせり。今日佛國邊の *Gallantry* 全く之に同じ。)一寸かく書しを讀むのみ

にては一向卑猥淫奔のみのこと、思ふべけれ、實際は大に然らず。都會の紳士が仲居を相手にする程の不義にも非ず。婚嫁の成立大家に非ざる限は皆この夜這に由りて定まることにて、色色試験した後に確定する夫婦故、却つて反目離縁等の禍も少なく、古印度や今の歐米で男女自ら撰んで相定約する如く村里安全繁盛持續の爲の一大要件なり。四角八面の道義家なご之を不埒な事の如く論ずるも、歐洲の若き夫婦が老父母にパンのかけを食せて己等が蜜を啜り肉を食ふて口を相拭ふ如く、實は其老父母亦若き時は彼等の老父母の前で斯くしたる也。今の老人亦古は夜這に由つて縁を組み今の若者を生みたるなれば、梁武の所謂吾より之を得て吾より之を失ふ又何ぞ恨みんご云ふ奴なり。封建壓迫時代の舊慣を襲ふて、折角生んだ子女を顯官富商の側室慰み物にして、御手が掛つたなご悦ぶ者より遙かにました簡なり。此夜這の規條不成文法如きも實は大に研究を要することにて、何ごか今の内に書き置きたき事なり。それを忽諸に付し又例の卑猥々々を看過して、さて媒妁がごうするの下媒妁人に何人を頼むの、進物は何を使ふの、事の末にして順序の最後にあるごをのみ書留むるは迂も甚し。田舎にては媒妁はほんの式だけのもの、夜這に通ふ内の通はせ文、約束の條々等が婚姻の最要件であるなり。

熊野に十年ばかり前まで松葉ミ小礫ミを餽つてマツニコイシをミ表示し、又其媒に由り生れし小女を小石ミ名くる等の風、小生も目撃せり。

兵生に四年前ありし時、十四歳ばかりの少女風呂場に來り、十七八の木挽の少年に附けまはり、種曰きつてくだんせミ荐に言ふ。解説は聞かなんだが、斯る年頃の者の破素せられぬを大耻辱ミするらしく、乃ち種曰切るミは破素のこゝなり。

兎に句隄より始めよて、地方經濟地方制度の事を之ミする雜誌ならば、貴下自ら先づ巫女考なきを止し、若くは他の地方經濟地方制度専門で風俗學不得手の人に、然るべく堂々たる模範的のしかしたる論文を、隔月ぐらひに冊の初部に出させられ度こゝ也。

最初高木氏より郷土研究の初號に載せるにて、小生に民俗學の要領を求められし。又高木氏自ら一巻一號に書かれし「郷土研究の本領」には、地方經濟地方制度比較法律俚團(Village Community) 研究等のこゝは少しもなく、(民族生活の研究云ふこゝはありしも、それでは Ethnology 又は Ethnography 即ち人種學又は記載人種學の事ミなる)。主として民俗學又話説學のこゝを述べられし。此外にも誰も地方經濟等の要領の論説ありしを見ず。随つて讀者一汎に郷土

研究ミは民俗學のこゝ、思ひ居るは、資料報告の九分九厘は皆民俗學に關し、殊には珍話奇譚の居多なるにて知るべし。若し郷土會の人々之を面白く思はぬなら、自ら進んで地方經濟地方制度の論文を出すか、せめては之に關する質問だけでも多く出さるるを要す。今日の處ては雜誌の半分以上を占むべき地方經濟制度の事が其一小部分に減縮し、他の一部分を占むべかりし民俗學が甚しく膨大し、且つ民俗學に多少縁ありながら地方經濟に何の必要なき説話學が別に又著しく贅附をなし居るなり。

小生の今昔物語研究又は堀氏の窮鳥入懷談、高木氏の早太郎童話考桃太郎の考、志田氏の國文學の杉等何れも本誌の要領に何の益も關係も無く除外せらるべきもの也。

斯の如きは最初創刊の際郷土研究の何たるを説明するに地方經濟地方制度を主眼ミする由を明示せざりしに由り、殊に其解釋なかりしに由る。今回の御狀の如くば一ツタタラ山姥山男等は一尙本誌に掲ぐべきものに非ず。此際郷土會の人々奮發してなるべく一人一論づ、又はせめて質問だけでも多く出さるべきなり。但し從來かゝる論文質問風俗學に比して少なかりしにて、實際地方經濟制度の學に留意する人の甚だ少なきを知る。

又貴狀の如くば、廣告如きも今度の「民俗」に出せる如く地方經濟に關する條項は少なく民俗學に關するこゝ居多なるは愈不適當ならずや。例へば商賣物貨交換入質に關する在來法の如きは尤も重要な一目なれど、全然廣告には見當らず、社寺に關する口碑はあれど之に關する習慣法も目錄に無し。地方制度より見れば此事最も重大にして、口碑なきはほんの小事なり。

例へば熊野にては、寺を改築するに從來三四年住職を止め無住にし節儉して儲蓄寄附し（住職自ら俸給を棄損する意なる）さて新築せし也。此事に氣付かず書上に無住とある寺を何の差別もなくむちやくちやに合併したり小寺に入れた故に、由緒正しき大寺にして亡びて田畑となり何の益も無きこゝ多し。又此邊に禪宗昔大にはやり、熊野地方は多く禪宗坊主が開きし。今も地方の俗謠に禪語のみのもの多く、一寸聞きては何の事か分らず。此禪坊主が地方を開きし方法の如きは大に研究を要す。諺に「天台公家眞言武家淨土町人禪百姓」と云ひて、禪宗は百姓の教北を専ら力めし也。又禪宗の尼は多く越前美濃より來る。良家の女も多く中には絶世の美女あり。蒙古人が子を多く喇嘛僧にする如く、不知不識の間に人口増殖を防ぐ一具ともなりたるこゝらし。彼邊にて一家毎に一人僧尼になりし所ありこゝきく。其割合

なき調べたき事也。

要するに貴狀垂示の如くならば、貴下先づ巫女考を中止し、制度經濟の論文を卷頭に隔月位に必ず一つづつ出され度こゝ也。然らざれば到底目的の奇談珍傳、又論文にしても郷土に關係少なき古話考や傳説編のみで満たさるるこゝなるべし。

但し高木氏編輯中は其人に出る偏重も多かりしは、地方郡縣誌なきに古話學民俗學の材料多きときは口を極めて之を譽め、又經濟制度を主とする書や報告の批評少なりし。

實業の日本、實業の何々を題して實業の事は少しも無く、放恣なる英雄的の人傳放言のみ書連ねあると等しく、制度經濟を主とする「郷土研究」に制度經濟に關する論文少なく、資料報告に至つては全く民俗古傳説のこゝのみなるは甚だ名義に背く。故に貴狀の意の如くならば、何ぞ半分又は三分の一だけは必ず制度等に關する事を述べられ度こゝ也。

次に論文又は報告中には、虛文のみで紙數限ある雑誌に何の益なき事無きに非ず。堀氏の窮鳥入懷譚の如きは短かく書かば如何やうにも書得るこゝ也。

かゝるもの「郷土研究」に出せしは心得られず。窮鳥入懷は三國の時劉政の故事にて、

佛説に關するここに非ず。若し關するここなりせば、此の古諺と佛説との聯絡を述べざるべからざるに、一言も其事無し。川口孫治郎氏の捕魚の話、又蜜蜂を徒す話等に、土地の風景や春色の序述で夥しく紙面を埋めたる所多し。此等は文章見る雑誌に非ざる以上は編輯人全く削除して可なりと思ふ。乃ち景色形容等の文は一行以上長きものは勝手に削除することせば、投書家終に自警することと思ふ。

若し又全誌の半分又は三分の一以上も地方經濟制度に關する論文材料報告質問で埋め得ずならば、是れ地方制度經濟の學は今日日本で成立せざるを示すもの也。公然綱領を改め民俗傳説學を主として經濟制度を従ふ事を望む。

・ 貴書に「記事の少くも三分の一位は貴下の注文外のもの有之次第」とあれど、實は每號三分一位どころか五分一六分一も小生注文外のもの無きこと多し。又皆無に近きこと屢々あり。是れ地方制度經濟の學は本邦で「らしきこと」を喋々し氣取る人士は多少あるも、進んで自ら之を論じ得る人甚だ乏しきを證す。即ち其學が成立し居らず發展の見込も無き也。一卷一號の「郷土研究の本領」には、地方制度經濟學に關する指示少しも明ならず。只日本民族の來

由研究に關する指示あるのみ。それならば人種學 Ethnology なり。又此「本領」を筆せし高木氏自分は、一文も制度や經濟に關することを書き居らず。従つて地方の者は何れも郷土研究は民俗學のこゝ、思ひ居れり。人類學雜誌昨年末再活の折の批評にも、「馬鹿に郷土研究じみた論文が多い」とありし。即ち批評家(高木氏と思ふ)自身も民俗學を郷土研究の異名と心得居たる也。何となれば人類學雜誌の十二月號は出口前田等諸氏の民俗に關する文のみ多く、經濟制度に關する文は無論一つも無かりし也。

當地今年雨多く菌類夥しく生ず。八歳になる男兒に十八歳になる阿房の下女添へ日々遊びに遣るに、必ず珍奇の新種二三は採り來る。之を畫くうち此長の日も暮れる。夜分は例の眠悪く何も出來ず。故に論文はいつ出來るやら分らず。從來の如き短きもの、又長くとも他人の論文や記事に附隨して書出すものは時々出來得べきも、右の如きわけならば何卒小生の民俗傳説のみに關する文は急がず、半年ばかりも主として地方經濟制度に關する文を出され度こと也。論文が集まらば此等に關する質問だけでも多く出されたき事なり。小生はも記憶よかりし故、今も多分こんな事があつた位のことには多々知り居る故に、時として書き始むれば底止する

所を知らぬこと多し。因つて成るべく短く書かんこと、はがき一枚を限り書き始むるも、猶不知不識はがき二枚三枚續くこと多し。要するに質問の答文や資料報告、又論文に云ふ程のものならぬ（他人の論文や記事に附随する批評半分の）追加文如きものは、いくらでも書き得又いつでも出来得る也。地方經濟制度等に關して民俗傳説に於ける小生如き人無きは遺憾なり。

本當に日本の地方制度經濟を研究して外國の之比較論斷する人あらんには、是れ國家の慶事なり、又頗る大必要のこと也。それにはその準備なかるべからず。小生外國の書目だけ控へ置くが今一寸見えず。見出でたら寫し可申上候。風俗學や傳説學は一地方一地方の材料を集めたもの多く、總論に云ふべきもの甚だ少し。之に反し比較制度經濟の學論は歴然たるもの甚だ多く、殊に獨逸に多し。

貴下試に地方の制度經濟の學に關する綱領を作り見られんことを望む。水論の處置、野を茹るに何れの村を先にし何れを後にするか、他村領に入りて取りて構はぬもの等、夥しく事項はあること、存候。只之を綱目にして前書申上たる民俗學の分類ほぎに作り上げたものあるを見ず。綱領を示さざれば衆人は地方制度は何の事か一向解し得ず。早々以上。

大正三年五月十四日午前三時出す

（大正三年郷研第二卷第五乃至第七號所載）

私の知つてゐる南方熊楠氏

中山太郎

私の知つてゐる南方熊楠氏

中山太郎

私は南方熊楠氏を、奇人だとか、變人だとか、又は單なる物識りだとか、そんな陳套な文句を以て品隲することは、氏に對する大なる冒瀆であるに信じてゐる。私は斷言する、南方氏は奇人とか變人とか云ふそんな小さなケタは、生れながらに超越した偉人であり哲人であること云ふことを。而して南方氏こそ眞に生ける日本の國寶であることを。

我が南方氏は日本に過つて生れた大學者である、言ひ換へれば日本が過つて生んだ大天才なのである。學者必ずしも天才ではなく、天才又必ずしも學者でないが、南方氏に在つては一身で此の二面を具へてゐるのである。寡聞ではあるが私の知れる限りでは、其の學殖に於て、其の精力に於て、然も識見に於て、氣魄に於て、我が南方氏に比肩すべき者を我國の現代に於て

否、我國の過去に於ても遂に發見するこゝが出来ぬのである。彼の勤績四十年を以て歐洲の學界に有名なるキングスカレッジ教授ダクラス氏が「南方は大偉人なり」を敬服し、更にロンドン大學總長ヂッキンス氏が「南方はそれ異常の人か、東西の科學と文學とに兼通せり」を激稱したのは、決して世辭でもなければ追從でもない、氏は不世出の大偉人、大異常人なのである。

○

南方氏の學殖に就ては、苟くも本書を通讀せられたお方ならんには、其の該博と深遠とに必ず驚かるゝこゝも思ふので敢て説明せぬが、精力の絶倫に就ては、氏が大藏經を三度精讀したとか、内外古今の書籍を讀破したとか、そんな月並のこゝではなく、更に驚くべき事實が數々ある。然し此處に其の總てを盡すこゝは許されぬが、私が一番驚いてゐるこゝは氏の書信である。一度でも氏の書信に接したお方ならば、卷紙に毛筆の飯粒大の細字で通例三尺五尺、長いのは一丈二丈と云ふ、一通讀むにも三日はかゝるゝ云ふほどの書信を、一氣呵成に書きあげる精力である。然もその書信たるや南方一流の引例考證の微に入り細を極めたもので、書き出しの時間と書き終りの時間（氏は如何なる書信にても此の事を附記する）から推して、引用書を

參考する餘裕はないと信ずるので、あれだけのものを全くの暗記で認めるのかと思ふと、實際異常の人を叫ばざるを得ないのである。然も斯かる長文の書信を、明治三十四年の歸朝後に於て先づ佛教に就ては故土宜法龍師（仁和寺門跡、後に高野山座主）に、植物學に就ては理學博士白井光太郎氏に、民間傳承に就ては柳田國男先生に、神話及び童話に就ては故高木敏雄氏に更に粘菌學に就ては小畔四郎氏に、淡水藻に就ては上松翁氏に、人類學及び粘菌に就ては平沼大三郎氏に、多きは數百通、少きも數十通を寄せてゐる。以上の中で私が披見したものは白井博士、柳田先生、小畔氏の三氏だけであるが、故高木氏の分は學友ネフスキー氏の談によれば、一部の書冊をなしてゐると云ふし、上松氏の分も、平沼氏の分も、又相當の量に達してゐるこゝも思ふ。これだけの書信、それは營業としてゐる手紙書きでも遣れるものではない。然もそれを研究の傍ら遣り通す氏の精力には誰か企て及ぶものか。

氏の識見と氣魄とに就ては、別項に就て記す考へであるから改めて此處には擧げぬ。更に氏の專攻である粘菌學に於て、如何なる位置を世界的に占めてゐるか云へば、これは左の數字が雄辨に證明してゐる。

大正十五年迄の世界植物學界に報告されてゐる粘菌の總數は、本種變種の二つを併せて（以下同じ）二百九十七種であるが、此の中で南方氏が獨力で發見報告した數は實に百三十七種に達し、氏の指導を受けてゐる小畔氏が五十二種、同じ上松氏が五種、外には理學博士草野俊助氏が十七種を報告してゐるだけで、他は世界各國の諸學者の報告である。多くを言ふを要しない、纔に此の一事から見ても氏の貢獻の如何に重きをなしてゐるか窺はれやう。氏が英國で發表した『燕石考』が、今や十二ヶ國の國語に翻譯されてゐるこか、更に『神跡考』が内外學者の驚異となつてゐるこか云ふことは、氏の名譽には相違ないが、然し氏にまつては全く餘技である。これを以て氏を測らうとするのは、未だ廬山の總てを盡さぬ人の管見である。

私も敢て氏の總てを知つてゐるこは言はぬが、如上の書信を通じ、更に氏を知る方々のお話を承り、それへ私が大正十一年五月から八月まで、前後九十日間親しく氏の口から聞いたこを綜合して、その輪廓だけでも明かにしたいと思ふ。聴き違へ覚え違ひも澤山あらうが、それは總て私の罪であるこは言ふまでもない。

○

熊楠氏は本年六十だから、明治元年生れになる。家は代々紀州日高郡矢田村大字土生^{はぶ}の庄屋を勤めて、同地方きつての大金持であつたこ云ふこだ。何でも熊楠氏の幾代前かの當主の折に、大阪の豪商鴻ノ池で結婚式を擧げる爲に、金屏風の借用方を同家へ申込て來たので、六曲一双を貸してやつたこころ、鴻ノ池では一双では足りぬモウ二三双貸してくれこのこに、同家ではそんなに持合せが無いと斷り言ふこ、いや有る筈だ、貸し惜みするこは怪しからんこ問答の末、當主が「金屏風はドンナ物かね」と尋ねるので、使の者は「それは金箔を置いた屏風さ」と答へるこ「金箔の屏風か、私は金屏風と云ふから純金の屏風のこかと思ふて一双しか無いので斷つたのだが、それなれば幾らでもあるから持つて行くが宜い」と、五双貸したこ云ふ逸話が残されてゐる。此の一事から見ても南方家は素晴らしい財産家であつたこが知られるが、熊楠氏の父は此家の次男として生れたのである。その頃は徳川の世盛りが過ぎ、南方家も以前のやうな暮し向きでなく、且つ土生村は僅に三十戸ほどの山間の僻地、かゝる猫額大の土地の庄屋におさまつたこころが致し方ない見極めをつけたものか、十一歳の折に家を飛び出し諸方に年期奉公を勤めた上和歌山に赴き此處で鐵物屋を初めたのが、その時の資本は驚く勿

れタツタ三圓五十錢だ云ふことである。

氏は鐵物屋の次男として知歌山市に生れたのであるが、父なる人は非常なる勤儉力行家で、後に和歌山縣で五番目、和歌山市では第一番云はれる資財を造りあげただけに、生活なごは出来るだけ質素を極めたものである。熊楠氏が幼時の辛苦を訴へた書信の一節に

(上略)家貧云ふには非されごも、父母至て節儉なる人なりし故、金錢にては一文もくれず、因て家で賣る鍋釜に符牒つくる藍紅がらにて、ブリキ板へ習字し、又鍋の包紙に買ひ來りし内に訓蒙圖彙十冊ありしを貰ひ、それを見て書を學べり云々
ごある程で碌々に學校へも遣られなかつたのである。

然し氏の凡人でない閃きは青鼻汁を垂してゐた時分から見えてゐた、それは十二歳の折であるが、同町内に古本屋があつて店頭で太平記五十冊が飾られてあつた。氏は此の本が讀みたくて買ひたくて仕方がないが、代價はご訊くご大枚三圓だ云ふ。金三圓云へば今日なら大食の者なら蕎麥食つても満腹せぬほごの金であるが、當時の氏にごつては容易に手にするごこの

出來ぬ大金だ、さればごて本を貸してくれご頼んだごころで、貸本屋ぢやないご云ふて斷はられるのは小供心にも豫測される。そこで氏は學校の往來毎に店頭に立ち、件の太平記を偷み讀みして三枚五枚ご暗記して歸宅し、半年餘りて全部五十冊を立派に寫してしまつた。

此の一事は全和歌山市の大評判ごなつた。それは人間業ではない、奇蹟だご云ふ聲が高くなり、流石に強情で學問嫌ひの父親も、「熊楠だけは別者だ、好きなら本を讀むがよい」ご許すやうになつた。氏の學問はこれで幕が明き、爾來、六十年の今日に及んだのである。

氏は十七歳にして上京し大學豫備門に籍を置いた。當時、同窓には芳賀矢一博士、故人ごなつた俳聖正岡子規、同海軍中將秋山眞之等がゐた。その頃の氏は遊學ごは云ふもの、決して世間並の書生のやうに、充分の學費を親から送つてもらつて、暢ん氣に本を讀むご云ふ境涯ではなかつたのである。半は苦學する有様である上に、當時から大酒を好み、その飲代を尠からず要したご、邊幅を飾らぬ天性ごて蓬髮弊衣、所謂ボロ書生の模型たるを失はなかつた。同窓であつた本多光太郎博士が當時を回顧されて語るに

私の知つてゐる南方熊楠氏

南方君は變り者で通つてゐた。夏になつても熱いと言はず、冬になつても寒いと言はず、金があれば飲む、飲めば議論をしかける、相手がなければ寝る云ふ有様だったが、此の寝るに就て珍談がある。それは南方氏は非常に猫を愛してゐた。素人下宿にクスぶつてゐたが猫だけは手放さず飼つてゐた。猫に食物を遺るのに肉でも飯でも、先づ氏が口中に入れて能く咀嚼し、營養の含まれてゐる汁は自分が嚙下し、残りの滓だけを與へる云ふ方法で、一人前の食物で猫と二人分を間に合せる云ふ新工夫のものであつた。それで冬になる此の猫を抱いて寝るのだが、これさへあれば夜具などは要らぬ云ふて、煎餅蒲團一枚の外は、悉く酒に代へてしまつたやうである。これでは猫を可愛がるのか利用するのか、一寸、その境目が分らぬが、兎に角に學生時分から變つてゐた。

南方氏が故原敬と交り結び、故山座圓次郎と肝膽相照し、故福本日南を小石川武島町の寓居に訪ねて驚かしたのも此の頃であつた。

○

南方氏は夙に體操無用論を唱へてゐた。全體、體操なんてものは都人士の腹ツべらしにしか

過ぎぬ。本當の學者には要らぬものであると稱へて豫備門時代たゞの一度も此の學科に出たことがない。その時の體操教師はフランスからのお雇教師であつただけに、氏の言分の通らう筈がなく立派に落第させられてしまつた。氏は憤慨やる方なく例の氣性で「ベラ棒め、己れほどの大學者を落第させるなんて、そんな日本には居てやらねえぞ」と大見得を切り、それこそ着のみ着たまゝで飄然としてアメリカへ渡航した。それは明治十九年の春で、帝都は墨陀や東臺の花に曉を覺えぬ行樂のときであつた。

○

アメリカへ渡つた氏は、ランシング大學の農科へ入學する考へで勉強してゐたが、此處でも例の體操無用論が祟り、それに教室へ出るよりは圖書館へ行く方が多いので、こゝでも美事に落第させられたので癩癩玉を破裂させ「ベラ棒め、己れほどの大學者を落第させるなんて、そんなアメリカなら學校なごには入つてやらねえぞ」と啖呵を切り、或るレストランの皿洗ひになつて獨學をやり始めた。

當時、熊楠氏は學問の趨勢に就て深く考へた。その結果、將來の學問は哲學と生物學とが、

私の知つてゐる南方熊楠氏

その中心にならなければならぬ。而して生物學の鍵を握るものは植物學の粘菌でなければならぬ。従つて自分は粘菌の研究に生涯を没頭しやうと、斯う所存の臍を極めたのである。が、皿洗ひの身分では参考書も買へぬので、世界の大學者の卵を以て任じてゐる氏も、大に弱つてゐるところへ、氏にまつて一大福音が天の一方から落ちて來た。それは曲馬團サーカスの書記に雇はれると云ふことであつた。

○

南方氏が歐米の事情に通じ、英、佛、獨、露、伊、蘭、支那、サンスクリット等の各國語に通達する基調を作つたのは、實は此の曲馬團の書記になつた賜物である。偶然と云ふことが人間の運命を支配するこの甚大なる、誠に思はざるべけんやである。

書記になつた氏は一行と共に中米、南米、メキシコ、西印度、キューバ等の各地の津々浦々まで約五年に及んで興行して廻り、親しく民情を究め文物を學んだ。そして氏の本職と云ふのは書記に相違ないが、實はラブレターの代書専門であつた。と云ふのは、何處も同じく女ならでは夜の明けぬが人情、曲馬團の到るところ一團の女藝人に對し浮かれ男の甲乙から花が贈ら

れる戀文が來る、今晚は一緒に食事がしたいとか、明日は馬車で遊びに行きたいとか、何の彼れと甘つたるい限りを盡し、駄辭迷句を聊ねたレターが舞込む、それに對して一々客の氣に障らぬやう、さればと言ふて曲馬團の面自を傷けぬやうな、柳に風的の返書を認めねばならぬ。之が熊楠氏の役目なのだから下情にも通ずる筈だし、辭書にも無いやうな通言粹句を覺えた譯である。然も此の間に在つて所期の粘菌學の標本採集と讀書とは一日も廢すことなく、折を見たり隙を窺つたりして研究を續けてゐた。

○

曲馬團がキューバーに到着した時であつた、同地の革命軍が西班牙の統治から脱がれやうと宣戦し、物情騒然たる有様であつたが、熊楠氏は革命軍の祖國を愛する意氣に共鳴し、空拳を揮つて軍に加り各地に轉戦した。その折に敵軍から狙撃され左胸部に盲貫銃創を受け病院に送られた。然るに此の從軍中、郷里和歌山で氏の實父は永眠されたのである。後年、當時を追想した氏の書信の一節に

父は六十四歳にて死するに臨み、眞言宗の信徒なりし故高野山へ人を登せ、土砂加持と云

私の知つてゐる南方熊楠氏

ふこころをなさしめたり、土砂を皿に盛り加持し、その砂の躍る様を見て病の吉凶を占ふなり。その時に加持僧の言はく、此病人は不治なりと、其者歸りて旨を父に告げしに少しも動せずこれ天命なりとて俗も借りた物を返すが如く従容して死にゆかれたり、其時小生キユバー島に在り、父死する六年前に出立、儀同三司の歌に「その時に着せましものを藤衣、ながき別れとなりける哉」その如くにて在外十五年中に父母共に死なし、出立のとき別れしが生別になれり云々。

回天の事業は志違ひ、蕃地に創を痛んで故國慈父の訃音に接す。熊楠氏ほごの偉丈夫でも九腸寸断の感を禁ずるこころが出来なかつたであらう。

○

創が癒えるこころ氏は英國に渡つた。そしてロンドン學會で募つた天文学の懸賞論文に多年の蘊蓄を傾けて應じ第一位を占め、學名一時に揚がり直ちに大英博物館の東洋調査部員に拔擢され日本及び東洋の爲に虹の如き氣を吐いてゐた。一九八九年大英科學獎勵會に論文を朗讀して大名をなし、一九〇三年ロンドン大學總長ヂツキンス氏を助けて、日本古文篇を大成してケンブ

リツチ大學から出版させ、更に同總長ミ鴨長明の方丈記を英譯し、皇立アヂヤ教會から出版させるなぎ、氏の學名は歐洲人の耳に迅雷の如く響き渡つた。

殊に氏が力を盡したのは、大英博物館の東洋部書籍目録の編纂であつた。それこそ汗牛充棟も當ならざる圖書に對して、一々解題を附し著者及び年代を明めるなぎ、氏の學殖ミ精力ミてなければ、倒底、成す能はざる大事業である。今に同目録が學者の間に珍重せられるのは全く氏の賜物ミ言ふべきである。

○

當時、ロンドンに往つた者で、恐らく南方熊楠の學名の餘りに高きに驚かぬ者はなかつたであらう、然も此の名ある熊楠氏が素人下宿の陋室に起臥し、二十貫余の巨軀を裏むにカラーもネクタイもない、醬油で煮染めたやうな上衣ミ、葱の枯ツ葉の如きよれよれの洋袴ミを以てし朝から晩まで大酒に食ひ酔つて熱楠のやうな暖氣を吐いてゐるのを見ては、更に驚き山の峠を飛び越えて、たゞ呆れに呆れぬ者はなかつたであらう。當時、福本日南が氏の下宿の模様を記して『彼(南方氏)が下宿の一室は、亦中々の見ものであつた云ふこころは、その穢ないこころ云

私の知つてゐる南方熊楠氏

つたら、無類飛切である。凹んだ寢臺に、破れたる椅子、便器の傍らには食器が陣取り、掃除なんか何れの世紀に試みられたか分らぬ云ふ光景であるが、感心であつたのは、書籍と植物の標本は幾んど一室を填めてゐた』云々。眞況、見るが如しである。

氏は大酒の癖ある外に、更に一つの厄介な癖がある。それは體力の旺盛なる爲か、野人の生活に馴れてゐる爲か、常に好んで素ツ裸で暮らすことである。然も氏の素ツ裸は全く文字通りの赤裸で、腰間にすら布片だに纏はぬ云ふのである。此の癖はゼントルマン氣質を國風とするロンドンに在つては誰彼なしに鼻摘みであつた。氏が轉々して居を移した原因は、腰間の一物をダラリミさせて屋内を歩くことが、常に下宿屋の物議の種となつて追放されるのである。そのクセ女は大嫌ひで四十歳まで淨く高く童貞を捧げて來たのである。

○

氏は在英中に母國の名士と交りを訂した。その中で故加藤高明、山本達雄、故徳川頼倫（氏の舊藩主）、鎌田榮吉、故土宜法龍、故福本日南氏等と誼が厚かつた。

氏が大英博物館に在職中、氏の雷名を更に轟かすべき事件が突發した。それは氏が在米中か

ら懇親を結んでゐた支那の革命兒孫逸仙が、支那公使館に監禁されたことである。支那政府としては孫氏が火の如き革命思想を鼓吹することは、打ち棄て置けぬ事ではあらうが、友人たる氏としては此の監禁を抽手傍觀するには餘りに血の氣が多すぎた。そこで氏は支那公使館に怒鳴り込む、文書で不都合を攻撃するなき、百方、手を盡して見たが、到底そんな事で釋放さるべき筈がないので、遂に博浪一撃の故智を學び、夜陰身を挺して公使館に忍び込み、漸くにして孫氏を救ひ出したのである。學者としてよりは寧ろ國士としての氣概に富める氏としては、これ位のことは朝飯前の仕事に過ぎぬが、これが爲に氏の學名は俠名に壓せられるほごであつた。

在英中の奇行逸話を記せば、それこそ僕を代えるも猶ほ足らぬ云ふ有様である。現存の名士であるからワザと姓名は秘して置くが、某貴公子が「ナニを南方か」位で軽く視た爲に天窓から嘔吐を吐きかけられ（氏の嘔吐は實に不思議で、吐きたいと思ふと何時でも吐ける、同人間では牛と同じ反趨作用を有してゐるのだらうと言はれてゐる。氏は此の奥の手を以て、幾度が氣に喰はぬヤツを撃退してゐる）て失敗した話は有名である。更にロシヤの植物學者オツサンサツケン伯と學會の席上で議論し、酩酊の結果は言ひへ伯の鼻ツ柱を嚙つたので、遂に大英

博物館を免職になつた。これが日本人同士なら、昨日は酒の上で鼻ハダ失禮した位で済んだか
 知れぬが、此の洒落は毛唐人には通用せぬのでクビになつてしまつたこじや。更に氏がロンド
 ン中の居酒屋（居酒屋は殆んど言ひ合したやうに街の角にある）を飲み廻り、自ら酔李白を以
 て許し、天子召せども船に上らずを極め込んでゐるので、福本日南から「角屋先生」のニツク
 ネームを奉られ、それでも「我輩は食ふ物は食はなくとも飲む物だけは飲んで勉強した」を矜
 語したこじや。更に徳川頼倫侯を大英博物館の秘密室に案内し、印度から到来したる田を荒し
 た女を牛が犯してゐる等身大の石像を見せて眼を廻させたこじや、數へて来るに殆んど際限な
 く存してゐる。然しかゝる事は決して氏の大を加へるものでないから割愛するが、猶ほ最後に
 特筆すべき一事がある。

それは氏が二度目に酒で大英博物館をシクジリ、それこそ大好物の角屋先生も廢業してゐる
 こ、突如として故ヴィクトリヤ女王からの勅命で、一日一ギネーで當分植物學を研究せよとの
 御沙汰を被つたこじである。當時の氏は「彌次喜多が富籤の札を拾ふた如き元氣と感激」を

覺えたのであるが、これは英國の帝室が貧乏な學者や技術家や、その他有益な著作等に取掛り
 居て研究費に窮せる者があるこ、その事の状態により或は半年、或は一年と其の者の薪水の助
 にして日々若干額の内帑を下されたものである。氏も此の露の恵みに浴したのである。勿論、
 これはロンドン大學總長ジツキンス氏の奏請によつたのであらうが、窮するも又た名譽なりと
 言ふべきである。

かくて明治三十三年の秋に、在外十五年の研究を終つて歸朝の途に就いたのである。

○
 明治三十四年の正月、氏から福本日南に寄せた一書は、氏の當時を知るべきものがあるので
 左に要點だけ抄録する。

新年の嘉儀茅出度申納候、昨年は中山氏（孫逸仙）の居處教へ下され難有御禮申上候、早速、
 書狀差出し候處返辭これあり、今春は小生方へ来る由に御座候、一體、同氏の一舉なごは多
 少水滸傳がかりたる事にて、霹靂火日南、華和尚熊楠なきの人物を多く集め、白馬でも斬て
 スキ焼に致し、大轟鼓、大吹角、和尚こゝに於て満々酌み、一連に飲み乾しければこ、高

私の知つてゐる南方熊楠氏

井蘭山流にやらねば合戦は出来るものにこれ無く、又敗軍もならんには、和尚一人踏止り例の嘔吐にて敵を破るこゝ何の雜作もなき事に候に、惜い哉彼れ年少氣鋭にして兵法を講ぜざりしこゝよ、魯人勾踐が荆郷を惜みしが如く嘆息致し居り候(中略)。

但し今回小生ロンドンを去るに臨み、角屋の亭主・酌女も別れを惜み、椅子に居据つたまゝ動かぬより、領布振山の昔を思ひ、石にでもなりはせぬかこ問ひ合せしに、毎度ながら餘り尻が永いので、各々歸宅の道の遠きを案じ、容易に動かれぬこの苦情、それではミヤオラ戸外に出づれば、毎屋半弔旗を掲げ候、扱は南方先生の去るを悲む古意かこ思ひきや、女王の伴が死んだのミイタリー王の鐵砲疵のお弔ひの爲こ聞き、

飲む人も飲まるゝ酒も諸共に

如露如小便應作如是觀

歸朝の船中四十五日、小生胸に一物あれば下等に乗し、押出した剩餘金を擧げて飲代に充て日々甲板に驅上り知らぬ連中を相手に珍談を講じ、それより大酒宴を催し候爲に、新嘉坡に達する前三日、船中用意の麥酒大罇の方全く盡き、香港以後は小罇にて制限を加ふるこゝ、

相成り候、是に由りて倚ら考ふるに、一船も亦一社會なり、一社會に氣運こか風潮こか申す事これあり候へき、それよりも必死こなりて働く烈士はより、必要にて、それが大精力を發揮すれば、氣運や風潮は手に磨くべくこ存じ候、飲代自分八十圓、他人より亂戰の御馳走約五十圓、神戸に上れば五圓しか囊中にこれなく候、歸國後は毎日平均日本酒二升こ麥酒八本つゝ飲み候に兄弟呆れ果て候故、酒屋(中山日、氏の令弟は南方常楠氏にて和歌山縣隨一の酒造家、故大隈侯から命名された名酒統一の醸造元である)が酒を悲む理由如何こ問ひ候へば如何にも酒屋は酒徒の多きを喜び候へき家兄の如く無錢多飲の客はあらずもがなこ遣り込められ、返答出來ず、こゝ少々閉口の體に御座候(下略)。

全幅、酒香に満ちてゐるが、その中に氏の面目の躍如たるものがある。

○

氏が海外に十五年の星霜を送るうちに、故家の實情も一變してしまつた。それは氏の兩親が亡くなるこ共に、氏の令兄の豪奢なる生活こ且つ無謀なる山カン事業のために、僅かに五年間で全く家産を蕩盡してしまつた事である。生家は斯くして亡び次に令兄も死なれたので、當然、

私の知つてゐる南方常楠氏

氏が家名を相續すべきであつたが、學問に忠なる氏にて令弟常楠氏に一切を譲り、その代り月百五十圓の研究費を生涯送らるゝ約束で氏は分家し、間もなく現住所の田邊町に居を移した。氏が田邊に永住の決心をしたのは、同所は熊野連峰に近き爲である。熊野は神代の大昔からの淨境、開闢以來、斧鉞を知らぬ處女林があるので、氏の粘菌採集及び研究には實に理想境なのである。

歸朝後直ちに大和太皇太后原に赴き、酷烈なる寒氣を冒して約一ヶ月に亘り露營した爲に、惡質なるリヤウマチスを惹き起し、右足の自由を半ば以上失つた氏にまつては、居ながらにして採集の便ある田邊町は、全く天が氏の爲に残して置いた場所とも言へるのである。

氏は此處に永住の地を覓め、幾くもなくして妻女を迎へた。妻女は源平盛衰記で有名な鬮鷄神社の社司の女、女今川をそのまゝ人間にしたやうな貞淑柔順の美點を備へた方だに聞いている。然して氏は四十歳、妻女は二十八歳、共に初婚であつて然も共に童貞を保つてゐたのである。明治三十五年の正月七日に、初めて那智の一ノ瀧の下で面會した小畔四郎氏に語つた氏の話の中に『我輩は美少年の事は知つてゐるが、女名をつくる者は嬬より外は知らぬ』この一句

があつたに云ふ、更にY氏に宛てた書信の一節に

小生四十歳まで女を知らず、然るに妻を迎へしに一發にして姪む、男子を擧ぐ幼名を姪六ひつ名く、これ便々たる腹をツキ出して這ひ廻る有様の姪に似たるを以てなり云々(中山曰、長男熊彌氏のこゝなり、後に長女を擧ぐ雪枝子と申さるゝ由、外に子なし)

研究に秋夜を惜み、酒盃に春宵を愛した氏にまつては、實際、女なきにかまけて居られなかつたのであらう。

○

研究に淫してゐた氏の日常生活は、新妻の身にまつては可なり厄介なものであつたらしい。熊楠一流の殆んゞ二六時中素ツ裸で、朝から晩まで顯微鏡ばかり覗つてゐられるのでは、家庭の和樂も夫婦の情味もあつたものではない。研究の半ばに晝飯を出したに云ふては膳部を投げ飛す、思索の最中に世話を話しかけたに云ふては鐵瓶が宙に舞ふのでは、如何に女今川を其のまゝ人間にしたやうな妻女でも堪えられるものではない、三度に一度は賣り言葉に買ひ言葉、投げ交す言葉に花が咲いて實家へ逃げ歸へる。するに氏は其後を趁ふて鬮鷄社の拜殿に素ツ裸

のまゝ大胡座をかき、結婚以來、微に入り細に至るまで、夫婦間の情事を漏さず書き記した日記を聲高らかに読み上げる。安宅關の辨慶龔を喰へ、一茶の七番日記でも跣足で駈け出すほどの珍妙な日記だ。これを聴かされては妻女は顔から火を出さぬばかり、眞赤になつて便所に隠れて耳を塞ぐ、身も姑も開いた口が塞がらず、何事が起つたか駈けつける町内の甲乙も、腹をかゝへるやら顔の紐を解くやら大騒ぎ、兩親は娘を呼び出し「親が兩手を合せて頼むからさうぞ歸つてくれ」を宥めたり偏したりして戻すのが常であつた。氏の戦法は斯かる事にも、奇想天外から落つるものがあつた。

更にこれにも増して愉快なのは、一年に一度、氏が和歌山の令弟常楠氏方へ、生活費を受取に往くときの有様である。その日になるに氏は家に有るだけの紙幣を悉く銀銅貨に兩替させ、それを双の袂に入れ、多勢の人々に送られて家を出て、波止場まで赴く途中その銀銅貨を撒きながら歩むのである。それは恰もお葬式の行列に花錢を撒くのと全く同じである。豫め此の事あるを知つてゐる町内の車夫馬丁、裏店小店の山ノ神連腕白小僧など、幾百人も云ふ群衆が道の兩側に堵列し、その錢を拾はんこて押し合ひへし合ひ雜鬧筆舌に絶えたる間を、二十貫餘の

巨身を悠々運びつゝ、羅漢面の眼尻を四十五度位に下げ莞爾しながら乗船するのである。「我輩の爲に水火を辭せざる者四百名あり、これを起さば天下を取るべし」は氏の口癖であるが是等は悉く此の撒き錢で手なづけた連中である。従つて田邊町に於ける氏の威望と信用とは實に絶大なものであつて、單に「先生」と言へば氏のこゝだも町民悉く承知してゐる。道徳講話に來た縣廳のお役人に對し「女のみさほこは、どんな棹ですか」と奇問を發してお役人の眼の玉を白黒させた熊野浦でも「南方先生」と云へば泣く兒もだまるも云ふ勢ひだ聞いてゐる。氏はかくして心靜に研究を續けてゐるのである。

○
此の威望と信用とを双肩に荷ふてゐる我が熊楠氏が、監獄へ打ち込まれたと云ふのだから、田邊町は勿論のこゝ熊野浦まで鼎が沸くやうな大騒動となつたのは當然である。何て氏は投獄されたか、その事件の真相はかうなのである。

明治四十三年、原内相の方針として神社の併合を奨励した。然るに和歌山縣では政商と利權屋がグルになり、由緒正しき神社であらうが、上下の尊信淺からぬ廟祠であらうが、苟くも其

の境内なり神林なりに、大金になる樹木のある限り、神主を欺き宮守を誑して併合の許可を得て伐木採樹させた。此の暴状を目堵耳聞した熊楠氏、天然物保存の上からも、崇神尊祖の風紀の上からも、看過すべからざる大問題となし、奮然渾身の勇を揮ひ縣當局者に政商利權屋を向ふに廻して戦ひを挑んだ。その結果、氏は新聞に演説に、將た文書の頒行に、三面六撃の大童となつて輿論の喚起を絶叫した。

氏の攻撃は相手方の急所を突いたので、縣屬田村某云ふ者から、詳細は拜芝の上貴意を得るから、一時、攻撃の手を緩めてくれと言ふて來たので、その意に任せ宣傳を控へてゐるこゝ、その田村某が神社の供進使として田邊町へ來たにも拘らず、氏の許を訪づれぬところか知らぬ顔の半ちゃんを極めたので、氏の満身の血は逆流し、直ちに和歌山に赴きしに田村某は講習會のため中學校に居るこのこゝに、同所へ往き面會を求めしに、會へ會はぬの争ひから椅子を投げたこゝか投げぬこゝかで騒ぎが大きくなり、取り靜めに出て來た和歌山警察署長を、氏が蹴倒したので更に事件が面倒となり、遂に十八日間を監獄に送るこゝとなつた。

和歌山縣の神社併合に不正事があるこゝに、それに對して氏が孤軍奮闘してゐるこゝは、在東

京の友人達にも夙くから知れてゐたので、何事か起りはせぬかこゝ内々配慮してゐるこゝころへ『南方下獄』の飛電は、少からぬ驚愕と不安を友人達に與へた。勿論、打ち棄て、置けぬ問題なので、相談の結果、當時、貴族院書記官長の柳田國男氏が友人總代として紀州へ急行して釋放に盡力するこゝになつた。

柳田氏は曾て當時を回想して左の如き意味のこゝを語られた。

南方が監獄へ入れられた云ふので、我輩が往くこゝになつたが、その時に生れて始めて肩書のある名刺を刷らせた。そして和歌山へ着き令弟にも面會して釋放のこゝを相談したが、元々、たいした罪も科さか云ふものがあるのではなし、それに同縣下の新聞が筆を揃へて當局の非常識を攻撃する、同じく辯護士會が其筋の無理解を詰問する云ふ有様なので間もなく放免された。その日、南方は欣喜雀躍の大元氣、ソレ酒だ云ふて飲み出し、十八日分を一度に飲んでしまつた。何でも七升位飲んだ云ふこゝだ。それで我輩が往くこゝ、折角、東京から來てくれた、然も初對面の我輩に、此の醉顔をお眼にかけるのは失禮だ云ふて、夜具を天窓からすつぽり引き被り、夜具の袖から聲を出して拶揆する云ふ有様さ、それで

も二人は夜明け近くまで話してゐた云々。

此の事件の経過に就ては、續南方隨筆に熊楠氏の「神社併合に關する意見書」が収録されることになつてゐるから参照されたい。

南方氏は睡眠四時間主義の實行者である。夏でも冬でも四時間以上は決して眠らぬ。そして極端な粗食主義である。衣服は嚴寒の頃には袷に半臂を重ねるだけで、他は裸體で押し通すのだから世話はない。それでは禮に嫺はぬ人か云へば、隣人の慶弔とか町内の會合とか云ふ場合には、紋付羽織に仙臺平の袴の時處に應じた嗜みは忘れぬ。たゞ夏でも冬でも水ッ涕を垂らしてゐるのが玉に瑕だ。これに就て珍談がある。

或年、高野に登山し、土宜管長を捉へて猥談（氏の猥談こそ天下一品であるが、詳細の記述が許されぬのは残念だ）を始め、管長は澁面つくりながら相手をしてゐるに、例の水ッ涕が二本、南方氏の啊呷の息につれて出たり入つたりする。見るに見兼ねて管長が「ソレ蜂の子が出た」と言ふに、氏は馬が行燈を啣えたやうな長い顔を突き出して、鼻汁をかんでくれと頷をしやく

つて眼で知らせた。管長も擬ろなく鼻紙出してかんでやつたが、その部屋が恰も關白秀次が自及した次の間であつたので氏の駄句に曰く

鼻かます次は關白自害の間

高野山の座主に鼻汁をかませたのは、天上天下僕一人だと言ふごめかしたものだ。氏に初めて面會する人は夢にも氏の水ッ涕を氣にして「鼻汁が」なき言ふてはならぬ。下手をするに土宜管長の二の舞をやらされるからである。

大正十一年四月、「己れは東京は嫌ひだ」と言ふてゐた氏が三十六年ぶりて上京した。それは『南方研究所』を建設せん爲の資金募集の要務があつたからである。私は此の折に始めて京橋の三十間堀の高田屋旅館で氏に面會したのである。然して氏が日光へ採集に行かれるまで、殆んど隔日位に推參して嚙咳に接した。滞在中の珍談奇行も尠くないが、これは餘りに新しいので他人に迷惑を及ぼす虞れがあるので姑らく預るにする。

研究所の資金募集は、氏としては先づ好成绩の方であつた。氏は之を銀行に預金し此の利子

で近く菌類圖譜を發行するに云ふて居られる。

氏に關しては未だ書きたいところが澤山ある。殊に氏の近狀に就て澤山あるが、餘りに長くなるので省略するより外に致し方がない。氏のバトロンであつて然も氏の高門である小畔氏の語るところによるに、令息熊彌氏が昨年からの大病で非常に心身を疲らせ、それに永年顯微鏡ばかり覗いてゐたので視力を餘程損じたやうである。本年の正月に小畔氏が氏に會ふたときにも持前の「六十四になれば己れは死ぬ」を繰り返して居られたに云ふことであつた。これは父が六十四歳で死んだから、己もその年には死ぬに云ふ氏の哲學ださうな。

然し都々の製作（南方氏は和歌も狂歌も狂句も作るが、都々が最も手に入つてゐる）に酒量は少しも劣へず、今でも毎日のやうに日本酒二升（冷酒が好物）に麥酒三四本を平げて平氣だに云ふから、此の分なら十年位は大丈夫と思はれる。切に自重を望んで止まぬ。

大正十五年四月

本郷千駄木の寓居に執筆

525

275

終